
だんだん雪が降り積もる

マーカスK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だんだん雪が降り積もる

【Nコード】

N8617K

【作者名】

マークask

【あらすじ】

週末、通りから1本外れたところにある飲み屋はいつもの賑わいを見せていた。
記憶、想い、移ろい行く町、すべてを包み込むように雪は静かに降り積もる。

？

夕方から降り始めたみぞれが、完全に雪になったのを、町のほとんどの人々は屋根に打ち付ける音が変化したことで気付いたが、この店の中の者は会話とそれによって巻き起こる喧騒で外が雪になっていることに誰一人気付いてはいなかった。

週末、店の中は徐々に混みだし、L字型のカウンターはほとんど埋まっていて、どうにか詰めてもあと一人か二人が座れるかどうかといったところだった。四人掛けのテーブル席は三つとも埋まっており一番奥にある六人がけのテーブルには食器やグラスが所々無規則に置かれ、一時的な物置と化していた。

入り口から見てカウンターが一番奥にはアゴ髭を長く生やした老人が座っていた。この老人はこの席が自分の指定席でもあるかのようにはほとんど毎日陣取り、一杯目にビールを飲んだあとはウィスキーとピーナッツでちびちびやるのが常だった。店が開店してから決まって三十分後ぐらいに現れ、年のわりにしつかりとした足取りで一番奥の自分の持ち場に行き席に着くと、もう何年も愛用している色あせた茶色い帽子を脱いで膝の上に置き、店内をグルリと見回した後、注文するまでもなく出てきたビールに口を付けるのである。他の客の話を聞いているのか聞いていないのか、たまにキョロキョロ辺りを見回す以外は大人しく飲んでいるが、常連客の誰かに「なあ、じいさん」と話を振られると、グラスを置き自分の意見を朗々と話し始めるのである。老人の話は大体にして比喻や引用に富んでおり、聞いている者は次第に比喻を話しの本筋だと勘違いしたり、引用した部分を老人の意見だと思ったりして、老人に話しを振った者も、老人が話し終えるころには何の話しを振ったのか曖昧になっているのだった。自分の意見を言い終えた老人が「フー」と息をつき、グラスを手にとると、そこには話しはじめる前と同じ光景が広がるのである。

老人の頭が入り口の方に向いたということ、新たな来客者が現われたということだった。開いたドアから流れ込む外の冷気が暖炉と人の熱気で火照り気味の店内を駆け抜け、入り口から近いところに座っている人達には、そのヒンヤリとした感じが心地よく店内は少し暑いな　と気付かせるきつかけになるのである。新たな来客者がコートと手袋を脱いでいる間も、客達のうち何人かは「先生こっちへ」とそれぞれの席を勧めるが、先生と呼ばれている男は奥まで歩いて行き、皆に挨拶を交わしながら老人の隣へ腰かけ「失礼します」と笑顔で言う　と女将にビールを注文した。老人は返事をするわけでもなく横目でチラツと、男を見るだけだった。

先生と呼ばれている男は眼鏡をかけていて色白で背が高く、肩までかかる髪は癖毛のせいで毛先が跳ねていた。

半年程前にこの町に赴任してきた小学校の教師のだが、立ち振る舞いや言葉づかいなどから垣間見える育ちの良さと、場を和ませる穏やかな口調で町の人々、特に生徒の親にあたる婦人達から人気を得るのにそう時間はかからなかった。

？

ビールが置かれると先生は老人に軽くグラスをつきだしグツと飲みだした。「若いのにいい飲みっぷりだ、先生」と隣に座っている屈強な体の男に言われると、先生は笑みを返しこの男とグラスを合わせた。老人はそれを横目で見ながらピーナッツに手を伸ばしていた。

屈強な体の持ち主は材木屋の男だった。たくましい二の腕と上着の上からでも盛り上がっているのがわかる胸板は、幼いころから木と接していくうちに出来上がっていったものだった。代々、と言ってもこの男の祖父のころからだが、材木屋を営んでおり、今は体力の衰えがここ数年顕著になってきた父親に代わり、今日四杯目のビールを豪快に飲み干したこの男が仕事場を取り仕切るようになっていた。父親は「まだまだ息子は半人前だから」と周りには言っているが、若い衆はもとより祖父のころから働いている古株にも一目置かれるようになってきた息子に、まんざらでもないといった様子だった。ただ、家族の、とりわけ母親の心配の種は、体だけが大きく育ったようにしか見えない息子に、嫁さんが来る気配がまつたく見られないことだった。町のそうだったことに世話をやきたがる、老人等に「誰か息子にいい子はいないかしらねえ」と話してみるのだが候補に上がる子に対しては一人息子を持つ母親の性分だろうか、なんだかんだ難癖をつけ、双方が会うと言つところまでも至らず、結局息子が結婚できない原因はお前が子離れできないからだ、と夫や義母に言われ、「そんなことはないわ」と言う反撃も弱いものとなった。しまったのだつた。

老人が体の向きを変え、先生に顔を近付けた。「孫は学校でどうかね。あれは何としても都会の大学に行かせたいのだ。数学と理科は申し分ないと思うんだが、外国語と歴史がなあ。わしは歴史は得意だったんじゃが・・・そこはきつと父親に似たんじゃ。まあ、あ

れはどの科目もダメだろうが、母親は歴史が一番得意だった。小学校から高校まで」

「お孫さんはとても優秀ですよ」先生は、老人の息継ぎのときにできるわずかな間を狙いすましたかのように言葉を挟んだ。そして、ビールを一口飲むと視線は正面を遠く見つめた。老人も体の向きを戻し、息を一つ吐いてグラスを手を取った。カウンターの先には女将が忙しなく動いていたが、先生と目が合うと少し困ったような、申し訳なさそうな笑みを返したのは、毎度、毎度、老人の相手をしてきていることへの感謝の念からだった。

女将は実に忙しなく動き回っていた。注文を受け、一方の手で飲み物を出す間も、もう一方の手はフライパンを動かしているといった具合で、それでも客の相手は怠らないのである。カウンターの外には手伝いに来ていたが、彼女はテーブル席の客から注文を受け、それを女将に伝え、出てきた料理や飲み物を持っていくということですらも満足にこなせているとは言いがたかった。注文は間違えるし、グラスは何度となく割ったし、客の冗談には、ただ顔を赤らめてうつむくばかりだった。手伝いに来て三ヶ月が過ぎたあたりからグラスを割ることは少なくなつたものの、注文の間違いや客への対応は相変わらずだった。女将も「この子にはこういう仕事は向いていないのかしら」と何度となく思ったが、客たちの方は彼女の失敗をむしろこの店で起こる一つのセレモニーだとすら思っているのか、話のネタを増やしている貴重な存在だと考えているらしかった。もつとも、彼女が十八にしては顔立ちも体付きも実に幼く、頼りない存在であることがいちいち責める気を起こさせなかつたのだろう。

その姪が入り口から一番近いところにあるテーブル席に料理を運んで行くのをチラチラと見ている者がいた。大工屋の見習いだつた。彼と同じテーブルに座っている親方に比べると、こんな体でレンガや木材を持つことができるのかと疑ってしまうぐらいに体の線は細く、髪はボサボサに伸び放題で、親方に「前髪ぐらいは切れ」と常

日頃言われ、ほつぺたにいくつか残るニキビは思春期の名残りを思い起こさせた。一杯目のビールを必死でなんとか飲み干すと、後はウイスキーの水割りを飲まずにただ口に付けるだけで飲み込みはせず親方や常連客の聞き役にまわるのだった。いつだったか親方に「お前は一度も二杯目を飲み干さないじゃないか」と言われてからは何とか飲むように心がけるのだが、十七の若者にはいかんせん酷というものだった。見かねた女将がこの見習いの注文には水を多めに入れ薄くしてから姪に持って行かせるようになったのだがこの娘のことである、女将から親方の分と見習いの分を間違わないよう念をおして言われているにも関わらず、今日のように忙しいときは何回かに一度は間違え、見習いはそのたびに顔を歪めながら必死で飲むのである。薄い方を飲んだ親方が「これは薄くないか」と女将に尋ねるが、女将は「もう酔っぱらたのかい」と軽くいなし、姪に視線で注意を送るのである。見習いはその光景を見ているので、自分さえ我慢して飲めばこの娘にもお咎めはなく、全て丸く収まるのだと顔を歪めながらまたグラスを口に運ぶのである。

？

姪が料理を持って来ると、入り口から一番近いテーブル席に座っていた二人組みは、待ちかねたと言わんばかりに姪が料理をテーブルに置く前に受け取り、姪に何か下世話な冗談を言いからかうと、姪は本当に形だけの愛想を引きつった笑顔で返し、その場を立ち去った。見習いは親方の言葉にうなずいてはいるが視線はその光景を追っていた。

二人組みがそれぞれの皿に料理を取り分け手をつけようとしたとき、店のドアが開き冷たい空気が店内に流れ込んだ。二人組みのうちドア側を背にしてない方だけが、ドアと人の間から垣間見える外の光景をうかがい知ることができ、雪が降り出していることに気付いた。

店内の真ん中のところにあるテーブル席から小太りの男が手を挙げて呼びかけ、入ってきた男も軽く手を挙げてそれに応えると、顔見知りには挨拶しながらそこへ向かった。小太りの男はビールを一つ注文し、自分のグラスも残り少ないのに気付くともう一つ追加してグラスに残っている分を一気に飲み干した。入って来た男はジャンパーを脱ぎながら席に付くと「他はまだ来てないのか？」と聞いた。「二人とも子供が風邪だから今日はやめとくとさ」小太りの男は、コースターを人差し指で回しながら言った。「風邪か、最近流行してるからな。お前んとこは大丈夫なのか？」男は脱いだジャンパーのポケットから煙草を取り出し、一本抜き出した。ライターがないのに気付いたが、すぐにさっきまで居た店に置き忘れたのだと思い、小太りの男のライターを取ると手のしぐさと目線で借りるという合図をし、小太りの男も小さくうなずいてそれに応えた。「ウチの方は、先週かかったからな。下の方の子がかからないか気になるんだけどな。お前こそ気をつけるよ。子供だけがかかっているんじゃないんだからな。独り身だと見てくれる人いないんだから。って言うて

も実家組は大丈夫か」小太りの男は、話しながらもビールはまだかと気にしながらカウンターの方をチラチラ見ていた。「独り身ねえ・」男は相手に言ったというより、ただ無意識に口からついて出たといった様子で、自分で吐いた煙草の煙を見ながら呷くように言った。姪がビールを持ってきてテーブルに置くと、小太りの男は乾杯をしようと男に向かってグラスをつき出したが、男の方は相変わらず煙草を吸っては、吐いた煙を虚ろな視線で眺めていた。小太りの男がグラスをつき出してるのに気付くと、男は慌ただしく煙草を灰皿に擦りつけグラスを合わせた。二人の会話は小太りの男が話すのをもう一方が、ひたすら聞いているといった一方的なものだった。男はビールを飲んで煙草を吸い、吐き出される煙をボーツと見て、たまに輪っかを作ったりしながら、相手の話にうなずいたり、視線を合わせたりするが、あまりに興味なさげなので小太りの男は何分か置きに「おい、聞いているのか」と男に呼びかけた。しかし毎度のことなのだろう、小太りの男もそれほど男の態度を気にしているといった感じではなく、ただ自分の話をするだけだった。男の方からすれば、小太りの男の話しというのは甲高い声と早口で一氣にまくしたてる上に、話題がそれまで話していたことから突拍子もないところへ飛び、混乱する男が何とか話の筋道を整理して、ようやく追いついたと思うと、また別の話題へ移り、最後にまた一番始めの話題へ戻るといふこともあり、会話に入ろうにも、ただでさえ寡黙な男は会話に入るタイミングを失ってしまい、口を開く機会を失ってしまうのである。しばらくすると、男はカウンターで並んで飲んでいる女二人の会話の方が気になりだし、意識はそっちの方へ移っていった。

？

こういった店の客はふつう男が中心、というよりほとんどだが、この店の場合、もともと女将の旦那が生きていたころはレストランだったこともあり、その時よく夫婦やカップルで来ていた女性客が、かつて楽しいひとときを与えてくれた記憶のせいだろうか、内装が変わり飲み屋になった今でも来ることは珍しいことではなく、その雰囲気若い女性にも入り易い空間を生み出しているのだった。

始め、女達が話していたことはファッションや料理、町の誰その噂話といった他愛もないことだったが、一方の髪の長い女が「いい人いないの？独りだと寂しくない？」と言い出したことから、話題はもう一方の髪の短い女の結婚話しに移っていった。髪の短い女は「ああ、またか」と思いながらも、自分の結婚観や男性観の話をはじめ、二人の会話はこの話題のときに一番が盛り上がるのだった。後ろの席の男は相変わらず甲高い声でまくしたてている小太りの男を見ながらも、意識は女たちの会話へと向いていた。

女達の会話が議論にまで白熱するころになると、呼ばれるまでもなく女将の出番である。「ねえ、女将さん、この子つたらこんなこと言うのよ」「彼女と私では考えがあまりに違いすぎるのよ」女二人は、自らの意見に女将の賛同を得ようと、雛鳥が餌をせがむように口々に訴えだしたが、女将はどっちに加担するといわなくても、ただ笑みを浮かべながら二人の話聞き、自分の意見を言うのである。それは、決して上からの物言いでも相手を言いくるめようとしているのでもなく、ましてこの店に集まる男共と話すときの、強い口調でもなかったが、二人はこの言葉を待っていたとも言わんばかりに妙に納得するのである。

この店に足繁く通う常連客のほとんど、その中に女性が多いのも、一つには女将の存在があったことだった。レストランだったころ、女将の旦那が厨房で料理を作り、女将は一人でホールを切り盛りし

ていた。その頃から女将は、忙しい合間を縫ってはお客さんと談笑し、時には会話に夢中になりすぎて旦那に「料理が出来てるぞ」と注意を受けたりしたものだ。しかし、客は料理の味以上に女将と過ごしたひと時に安堵と充足感を覚え、またこの店に足を運ぼうと思うのである。三十も半ばを迎えるころに旦那が亡くなり、店を畳もうと考えていた女将に、常連客の何人かが店を存続して欲しいと頼んだが、自分では旦那のように料理を出すことができないのを理由に断ろうとした。そんな中、女将が最も信頼を置いている弟が「だったら姉さん、ちよつとした飲み屋みたいなのをやればいい、その程度だったら、姉さんの料理の腕とレパトリーでも十分過ぎるぐらいだよ」と助言を与え、女将も「みんながそんなに鼻屑にしてくれるのなら、私と夫との間の唯一といっていい形ある物だから」と、この店をはじめめる決心をしたのである。飲み物や食べ物の仕入れから内装の改装まで、弟や常連客、数多くいる女友達の助けを得て、どうにか店をオープンしてから十年以上を経た今となっては、レストラン時代よりも客の入りが増えていくほどだった。女将はまだ二十歳を少し過ぎたぐらいの二人を見ながら、自分が結婚したのは、今のこの子たちよりも若かったのだと思い、一日の仕事が終わり、鏡台の前で鏡を覗き込むときに見える目尻や口もとのシワ、張りがなくなりカサカサになった手を想像し、しばしの感慨にふけるのだった。

？

材木屋の男が、ビールをもう一杯頼み「先生の分も」と付け加えたが「私はウオツカを」と言うと、材木屋の男は「先生はほんに見かけと違って男っぽい飲み方をするなあ」と先生の肩に手を掛けながら言った。先生は口もとに笑みを浮かべたまま逆を向き、老人に「もう一杯お飲みになりますか」と聞いた。老人は、ウイスキーと溶けた氷の水が混ざり合ったものが、わずかに底に溜まっているグラスをつかみながら何やら口を動かしているが、それは声にはなっていないかった。「じいさん、週末だ、飲め飲め、先生もせっかく勧めてるんだ」と材木屋が促すと先生は「あまり無理をなさらないで」と小さな声で言い、老人は時計をチラチラ見ながら、なおも口をもごもごせ声にならないものを発していたが、意を決したようにグラスを上げて「もう一杯おかわりを」と言ったものの女将は逆のカウンターにいて気付かなかったので、後でこつち側へ来たときに先生が代わりに注文をすることになるのだった。

店のドアが開き、また冷たい空気が店内に流れ込んだ。入ってきた男に店内にいた全員が注目したので、店は一瞬だけ静まったが、皆男が入ってくる前の状態に戻そうとするかのように会話を再開したので、店の中はすぐにざわめきに包まれた。女将が「ここへどうぞ」とカウンターの真ん中のところを指し示すと、カウンターに座っていた客は全員少し詰めたので、一人分が座れるスペースが空いた。煙草を吸っていた小太りの男の相棒が、煙草をくわえたまま自分のテーブル席から椅子を一つ取りカウンターの空いたスペースに置いた。入ってきた男は椅子を置いてくれた男に礼をいい、重くゆったりとした動作で腰掛けた。女将が「寒くはないの?」と言ったが、男は首をゆっくり横に振り、ビールを注文した。店の客はそれぞれ勝手気ままにしゃべったり、飲んだりしているように見えるが、男が入って来てからしばらくは、明らかに皆多かれ少なかれ、この

新たな来客者を気に掛けずにはいられないようだった。女将が「あんまり気を落とすんじゃないよ。亡くなってしまうものはもう言っただって始まらないじゃないか。前だって何とか乗り越えただろ。さっ、今日は楽しく飲んで」と仕事を一時中断し、男の肩をポンポンと二回叩いた。男の両脇にいた初老の男と女も、だいたい女将と似たような慰めの言葉を掛けて男を気遣った。初老の男の隣に座っている二人の若い娘たちは会話を続けているが、やはりこの男のことが気になるのだろう、先ほどより小声になり男が入ってくる前、店内の喧騒を生み出していた大きな要因にはなりかねていた。

店内の者は女将さん達のやりとりを見たあと、口々に男に言葉をかけた。材木屋の男がこういった状況には慣れてないのか、精一杯のはげましの言葉を不器用ながらに言い、小太りの男はそのおせっかいかとも思える性格そのままの、まったく関係ない話題まで持ち出してきて励まし、相棒は男を見ながら頷き、自分の友人の言うとおりにだという賛同を示していた。老人は相変わらず無愛想な面でもウイスキーに口を付けていたが、先生がこういう時にふさわしい事柄を、何かの本で読んだエピソードとして話すと、自分もそうだろうだと、急に言い出した。少し小声になっていた二人の女も「また子供はできません、できません、きつと神様はまた授けて下さいます」と訴えるように言った。他の客たち、先生たちとは逆の方に座っている酔いのせいでロレツが上手くまわっていない頬にアザがある男も言葉をかけていたが、男が他の者の話を聞いていたのと、アザの男の声が小さかったので、届いてはいなかった。アザの男の隣りにいる、常に笑顔を絶やさない陽気な成年でさえ「酔っ払って独り言を言い出しているのだな」と思っていた。

アザの男とこの陽気な成年がカウンターの入り口側に座り、老人が奥の方というのは、この店ではほとんど変わらない位置関係だった。店が飲み屋として開業してすぐの頃から、老人は一番奥の定位置を確保するようになっていたのだが、そこへアザの男が席はまだ他に空いていたにもかかわらず老人のとなりに座りだした。アザの男は

いつも一人、端へ腰掛けている老人に興味をもったのである。老人は基本的には無口で、アザの男がただ一人で延々としゃべり続けていた。しかし、アザの男の言葉に、まれに老人は反応し、お得意の比喩と引用に富んだ演説を始めるときがあった。アザの男は最初のうちは、老人は博識なのだ、と教えを請うような姿勢で話を聞いていたが、ときとして老人は、アザの男の無知を馬鹿にしたような物言いや、この町の文句まで言い出すので、あるときからアザの男は老人の隣りには座らないようになり、一番反対の席に付くようになったのだった。そして毎晩一人で飲んでいるところに、自分が老人に近づいていったのと同じように、今、隣に座っている、何が毎日そんなに楽しいのか、いつもいつもいぶかしげに思わせるこの陽気な成年がいつごろから座るようになったのである。アザの男は家に帰ると、妻に店でのことを話すが日課になっていて、前は老人や他の客のことだったが、今ではほとんど陽気な成年のことになっていた。「あいつは、毎日なにがそんなに楽しいんだか。なんで俺の話をそんなに聞きたがるんだ」と不満そうに述べていたが、妻は今となっては夫の半生を示す唯一の証拠品でその存在を支えるといつてもいい、壁に掛かっている制服にブラシをかけながら無関心に相槌を打っているようで、この偏屈な夫に年が二回り以上離れてるとはいえ、話し相手がいることにホッとしている様子だった。

？

外では雪が降り続いていた。通りの人影は週末にしては少なく、おそらく雪は今夜中にも積もると予想したのだろう、皆週末の夜を各々の家で静かに過ごしているようだった。そんな中、大通りから一本脇へ入った路地にあるこの店は中の人々のアルコールが回りだすに連れ、活気と喧騒は数時間前に入ってきた男のときに一時下がったものの、今やその前以上に上昇していた。

小太りの男の身振り手振りは飲みが進むに連れてさらに大きくなり、声はところどころ裏返ったりしていた。相棒は相変わらず話を聞いているのか聞いていないのか、煙草の煙を見たり、他の客、とりわけ女二人組みの話の方が気になる様子でチラチラと横見したり聞き耳を立てたりしていた。大工の見習いは肘をテーブルにつきもう半分うなだれていて、親方が呼びかけると、何とか頭を上げ返事をするのだが、目はとうに虚ろで、すぐにまたガクリとなった。親方もカウンターの客との会話に夢中なので、体はカウンターに向いていて、見習いのことをそれほど気にしてはいなかった。姪は見習いのことが気になり水を持っていくが、何も言わずに置いてくるので、うなだれている見習いは気付かず、もうできあがっている親方が飲み、また持つて行っても親方に飲まれてしまい、それが三回ほど続いた後で、姪はようやく見習いの肩を叩くが見習いはちっとも気付かなかつたので強く叩きだし、ついには肩をつかみ揺すりだした。すると、見習いの頭を支えていた肘はガクツと崩れ見習いは頭をテーブルに強く打ち、それに驚いた姪は見習いの頭に触れようと手を伸ばした。そのとき姪の肘が自分で持ってきてテーブルの端に置いてあったグラスに当たると、グラスは床に落ち、喧騒の中に一瞬高い音が響き渡った。店内は静まり返ったが、親方が「おっ今月に入って始めてなんじゃないか？」とひやかしたのでドツと笑いが起こった。女将さんも今日は特に忙しかったし、仕方ないと思った

のか苦笑いを浮かべて「切らないように気をつけて」と言ったあと、材木屋の男に「ちよつとあの坊やを起こして、奥に連れていってくれないかい？」と促した。材木屋の男が言われたとおり見習いを担ぎ上げ、親方が「悪いな」とやり取りしている間、見習いは「大丈夫、大丈夫」と材木屋の手を離れて一人で立とうとするが、足取りはおぼつかず、六人がけのテーブルがある奥に連れて行く途中も力ウンターの客の背中やテーブルの端にぶつかっていた。奥の老人にぶつかったときは、材木屋が「すまねえ、じいさん」と謝ったが、老人は特に気にするわけでもなく先生に孫の話聞いていた。材木屋が椅子を並べている間に女将は毛布を持ってきた。毛布はかぶせるのではなく椅子の上に敷き、材木屋はそこに見習いを寝かせ「あんまり動くと落ちるぞ」と言つと席に戻って行った。女将は「あの子ったらまたお前に持つていくやつと親方に持つていくやつを間違えたんだね、ちゃんと持つておくからね」と見習いの額や頬を触りながら、語りかけたが見習いの意識はもう遠のき始めていて天井の電灯がぼやけて見える中、女将の手が冷たく、それがとても気持ちのよい感触だということがわかるのみだった。姪はテーブルや椅子を最小限動かしながら、実に手際よくほうきで割れたグラスを集め、ちり取りに入れていった。あまりに手際がいいので、その様子は物を運んでいったり、注文を受けたりするときの慌ただしさと比べると別人のようだった。だが、何のことはない、始めのうちあまりにグラスを割るので、客の気にならないよう、時間がかからないようにやるために習得していった結果の慣れに過ぎなかつたのである。

初老の男女二人に挟まれた男は少しずつ会話をはじめだし、今はお酒のせいもあってかだいぶ饒舌になっていた。両脇にいる二人は男の話を親身になって聞いてくれた。話しながら身内よりもこのぐらゐの間柄の方があまりにも苦痛を受けた体験を話すのにはよいのかもかもしれない、と男は思つたりした。初老の男女は男が間にいて自分のことばかり話すのを、はじめのうちには同情心から聞いていたが、そのせいで自分たちの会話ができないのにやや不満を感じはじめて

いた。とりわけ男の方は女がいつ帰ると言い出してしまふのかを考えて、やきもきしていた。初老の女が店に来るようになってから一年が過ぎた。店に来るようになる三ヶ月前に二十年あまり生活を共にしていた旦那を亡くしていた。店に来るようになってきたきっかけは、旦那の葬儀のとき女と同級生だった女将が「悲しいのはわかるけど一人で家に閉じこもっていちや体にも良くないから、一度店に遊びに来て」といったのがはじまりだった。女は壁に掛かっている時計を見ながら、旦那が生きていたころは夜出るなんてほとんどなかったなあ、と物思いにふけていた。

旦那と出会ったのは、女がカフェで女給をしているとき、通りを挟んで斜め向かい側にある材木屋で働いていた、後に旦那となる男が昼休みのたびにカフェに来るようになったのがきっかけだった。女からすれば男の印象は、注文を尋ねても、実に無骨な表情のまま「コーヒー」とだけ言い、店を出るときの女の挨拶にも反応がないので、なんにでも自分に原因があると考えがちな女は、自分にどこか至らないところがあるのではと思っていた。しかし、一番分らないのは男が決してコーヒーを好きではないように感じられることだった。あれだけ砂糖とミルクを入れては、コーヒーの味はほとんどかき消えてしまうだろうと思いい、それを飲む旦那も実に苦々しげな表情で一気に飲み干すので、あれじゃ味もなにもあつたもんじゃないわ、と男が帰った後、砂糖とミルクを補充しながら首をかしげるのだった。あるとき、男は二日続けて来なかった。いつものようにお昼の時間になり今日は来るのかしら、と女は思いながら、ティーカップを拭いていた。男はほとんど毎日来ていたが、それでも月に何回かは来ない日もあった。しかし、二日続けて来ないということはないのである。いつの頃からか女は男が来ないとなにかしらそれは感情的なものでは決してなく、何気ない日常を構成する何か、わずかながら欠けているような気がし始めていた。三日目のお昼も男は現れなかった。代わりにというわけではないが、入ってきたのは、今同じカウンターに座っているあの豪快にビールを飲み干

した男で、その時は今と比べ腕や肩の筋肉が一回りほど小さく、顔立ちにも若干の幼さが垣間見えていた。材木屋もちよくちよく来ていたが、旦那ほどではなく、注文するのはフルーツジュースか紅茶だった。オレンジジュースをテールブルに持っていったときに、女はそれまで挨拶以外は交わしたことがなかったが「あの人は今日は来ないのですか？」と緊張した表情で、しかしそれが特に知りたいと言わうではないというような様子で話しかけた。材木屋は女を見上げながら「彼は作業中に怪我をして今は休んでいるんだ」と言い、オレンジジュースを飲んだ。女の表情は強張り、一瞬動きは止まったが、すぐに「怪我は重いのですか？」とできるだけさつきと変わらない感じで問いかけようとするが今度は早口で声もつわつていった。材木屋は、なぜ女がそんなにあの男のことが気になるのか、と思いつつも怪我の内容を説明した。それによると、作業中に立てあつた材木が落ちてきて男の肩に当たつたが、決して大事ではなく、仕事に來れないこともないが、親父（彼にとつては実の父親であるが他の従業員からもそう呼ばれている）が今週いっぱい自宅を休めと言いつけたらしかった。その後の会計のとき、材木屋は男の家がこの道の角を曲がつたところにあるパン屋の二階だということとを女に教えた。女はそんなに近くに住んでいたことに驚きながらも、なぜ私にそんなことをわざわざ言うのだろうという少し戸惑つた表情で材木屋にお釣りを渡したが、材木屋はそのことにまったく他意はないといった様子で女の表情を見るまでもなく店を出ていった。女は仕事が終わつてからの帰り道、男の家の前を通つた、と言つよりもそこはいつもの帰り道だったのだ。パン屋のショーウィンドウにはもう残りわずかしか商品がなく、見上げると左右に窓があり、どちらが男の部屋なのだろうかと女は考えた。女はしばらくの間、両方の窓を見上げていた。パン屋の中では後片付けがはじまり外に出てきた店主が女の方を一瞬見たあと看板をしまい、やがて電気が消えた。初秋の風は昼間の心地よい涼しさから、少し冷たく感じられるくらいになり、陽はもう西の空にわずかばかりの赤味を残

すだけだった。女が手に持っていた上着を袖に通したとき、右側の窓が開き男が顔を出した。女がアツと声を上げる間もなく男は女に気付き軽く会釈をした。女は怪我の容態を聞いたが、言ってしまうたあとで、あまりに唐突だなと思ひ直した。すると男は「大丈夫でさあ、この通り何の問題もありません、来週にはまたコーヒーを飲みに行きますよ」と右肩を上げ左手でトントンと叩いた。女は挨拶をして立ち去ったが数歩歩いたあと振り返り「コーヒーよりもフルーツジュースの方が飲みやすいですし体にもいいですよ」と、出せる限りの精一杯の声で言った。男は彼女にこんな大きな声を出すことができるのかと、驚きながらも右手を思いつき振った。男の姿は部屋の明かりでシルエツトとなって女には確認できるだけだった。翌週、男は店に現われた。女が「ご注文は？」と聞くといつもの無骨な表情で「オレンジジュース」と言った。女は笑顔で「かしこまりました」と応え、厨房に戻るとオレンジをしぼるのだった。

？

間にいる男は女よりも男の方を向いてしゃべることが多くなった。女にとつてはそつちの方が都合がよくグラスを見つめながら、これを飲んだらもう帰ろうと思っていた。初老の男は隣りの男の話にならずにしているが、視線は男の頭越しに女の方を見ていて、いつ席を立ち上がるのかと気になって仕方がないようだった。

老人は時たま先生に話しかける以外は静かに飲んでた。規則正しいペースでグラスを空けるので、女将とはどれくらいの間隔で注げばいいのがある一定の呼吸が出来上がっていた。それにしても、今日は長い時間いるわね、と女将が三杯目のお酒を作りながら思っている、喧騒からはみ出る二人の怒鳴りあう声が聞こえてきた。みんなも会話を止め、その怒鳴りあつてる二人の方に注目しだした。入口から一番近いテーブルに座っていて、姪をからかっていた二人組みだった。一人は出っ歯でしゃべる度に唾が飛び、人差し指を突き立て相手を指差しながら、喚き立てていた。相手の方は、腕も足も同じぐらいの細さしかないのではないかと見紛うほどのとても痩せた男だった。この男も出っ歯の男と同じように人差し指を突き立てて喚いているが、時たま掛かる唾を拭うため袖で顔を擦る姿が何やら滑稽にすら感じられた。この二人はこれまでも酔いがまわってくる度々喧嘩をはじめ、その都度、材木屋や親方が止めてきた。注意されるとすぐにやめるので、この二人自身、そこまで考えた上で怒鳴りあいをはじめていると見えなくもなかった。ただ一度だけ、そのときは二人が喧嘩をしたのではなく、入ったばかりの姪をあまりにからかうので、大工の見習いが出っ歯の方に飛び掛かっていったことがあった。椅子ごと二人は倒れ、テーブルの上のグラスや皿は落ち、痩せた方は何故こういう事態になっているのか状況がよく呑みこめず唾然とするだけで、姪はあたふたと何をどうしたらいいのやら、そのうち涙を溜め潤んだ瞳で、取っ組み合っている二

人と女将を交互に見るだけだった。親方や他の客がなんとか二人を分け（その日材木屋はいなかった）その場は何とか収まった。見習いはこつぴどく親方に叱られ、二人組みも女将から「これ以上うちの子をからかうと店に入れないよ」と言われ、姪も「あんたもあんな奴らの言うことなんか気にしちゃダメ」と店が終わった後で注意を受けた。他の客からの厳しい視線にしばらくは反省の態度を見せていた二人組みだったが、一週間と経たないうちに、また姪をからかいたした。しかし、見習いと女将の様子をうかがいながらなので、さすがに以前よりはしつこく言わなくなっていた。

二人の言い争いは激しさを増し、出っ歯の男が痩せてる男の胸ぐらをつかみ、自分の方に相手を引き寄せると、顔を近づけ、さらに強い口調で喚き立てた。痩せてる男の方が頭一つ分ほど背が高いので、顎をしゃくり上げながら相手を見下ろす形になった。痩せてる男が出っ歯を突き飛ばし、後ろによるめいた出っ歯の男が再び痩せてる男に向かっていこうとしたところで、「よさねえか！」という親方の声が響き渡り、二人の男の動きは止まった。二人が店内を見渡すと、材木屋も立ち上がり、二人の方に向かってくるところだった。二人はバツが悪そうに椅子を元の位置に戻して座ると、お互い眼を合わせずにグラスに口をつけた。それを見届けると材木屋は席に戻り、親方はやれやれ、と言った表情で、また常連客としゃべりだし、それと共に店内には喧騒が戻りだした。女将がビールジョッキを二つ持ち、さっきの二人組みのところまで出向き「あんた達何度言ったらわかるの、次喧嘩したら本当に店には入れないからね」と言った後で二人の頭を軽くポンポンと叩くと、「ハイ、仲良くするんだよ」とビールを二つテーブルに置いた。二人は女将とは目を合わさず、しかめっ面で居心地が悪そうに無言でビールを飲み続けていたが、女将がカウンターに戻ってから数分もしないうちに、再び出っ歯の男の唾は辺りに飛び散らかるのだった。カウンターの中の女将はその光景を見て「あんなにすぐ元に戻るんなら、なんでいちいち言い争うんだろうねえ」と先生にこぼすと、先生は「あれも

この店の行事の一つですよ」と酔いがまわってきたのか、少し赤みがかった顔に笑みを浮かべながら女将に言った。

？

親方は見習いのことなど頭にないのか、椅子をカウンターの方へ向けたまま一人の男とずっとしゃべり続けていた。相手も椅子を横にして体は席の方へ向けたままの姿勢でしゃべり続けているので、テーブル席へ来くればいいものをカウンターからは動かず親方も席を勧めなかった。相手の男は役所に勤めていた男で、一年前に定年を迎えていた。男と親方の付き合いはこの店の中では比較的新しいもので、二年前にこの男が家を新築するというときに親方のところに頼んだのがきっかけだった。役所の同僚にやはり親方に家を建ててもらった者がいて、その同僚の家を男が訪れたとき、家の造りに関心し、どこの大工に頼んだのかと聞いたところ、親方の名前が出たのである。同僚の家はこれといって特徴的なところはない、二階建ての家屋だった。土地はそう広いわけではなかったが、小さいながらもしつかりとした庭があり、中の造りもリビングの窓が普通と比べると大きいと思える以外はこれといって際立ったところはなかった。ただ、光がたくさん入ってくるのは気持ちがいいと感じられた。男は自分でもなぜ同僚の家をそんなに気にいったのかはよく分からず、妻に親方のところに家を頼む理由を聞かれたとき、強いて言えば、あの簡潔さがいいとしか応えれなかった。妻は何にしても家を新築するのが夫婦の夢だったので、建ててくれるのであれば、細かいことはどうでもいいと思っていた。子供達三人のうち二人は独立し、末の三男も来年の春には進学のため、都会へ行ってしまうことを思えば、部屋数もそんなに必要ないので、広いキッチンという条件さえ満たしてくれれば、後は夫の書斎を作ろうが、庭を広くしようがどうでもいいと思っていた。家の建築が開始されると男は足繁く現場に通い、親方の設計図を指差しながらアレコレと質問したり、談笑したりしていた。しかし、仕事に注文をつけたりすることはなく、親方の現場の指揮ぶりに感服し、親方のところの職

人さん達はじつに働きぶりがいい」と褒めたりするので、親方も機嫌が良くなり仕事の話をするのは好きなので、いろいろと説明をしたりするうち、親方が行き付けのこの店に連れられて来るようになった。男はお酒がそんなに好きという訳ではなかったが、店の雰囲気や女将さんの人柄を気に入ったことに加え、なにより家から近いというので、最初のころは親方に連れられて来るだけだったが、今では一人でも店に現われ、家が完成するころには常連の一人となっていたのである。去年の春に完成した家は、大きめの窓が陽射しをリビングいっぱいに吸収し、キッチンには妻の要望通り広がったが、子供達が去った今、二人分の食事を作るにはいささか持て余すわ、と住み始めてから妻は愚痴をこぼしたがキッチンにいる時間は明らかに前の家のときに比べ増えていた。書斎の窓からは庭が見えるようになっていた。庭にはまだ何もなく、これから何を植えようかと考えるのも楽しみだったが、一年経った今もわずかばかりの花木が植えられているだけで、その作業は遅々として進まないのだった。

？

親方と役所の男の話は亡くなったこの店の主人の話題になっていた。直接の面識がない役所の男にのみならず、親方が常連客に前の主人の話をするのは、今ちょうど親方が座っている席と小太りの男達が座っている席との間に小さな足の細い丸テーブルが一つ置いてあり、その上にある写真立ての中の主人が目に入ってくるのもきっかけの一つにあるのだろう。店を背景に前の主人はコック帽を被り、腕を組み威厳のある顔立ちで立っていて、隣りには若いころの女将さんが今よりも痩せていて、顔立ちにまだ少女の面影さえ残して寄り添っていた。店のオープンのとくに写したのだろう、建物の外観が今に比べて真新しかった。親方はレストランが出来た当初からの常連で、主人は若いころから外国に行つて料理の腕を磨き、町の外からも熱心に通う客がいるぐらい腕は確かな男だった。「無口だが、料理の事を聞くと熱く説明してくれたなあ、年がちょうど一緒に、まだあのころは俺もようやく師匠に一人で仕事を任されるようになってきたころでなあ、業種は違うがアイツの料理を口にするたびに感心すると同時に俺も負けてはらねんと励みになったものさ」と役所の男に話すと、役所の男は写真を見て、うなずきながら「女将さんにもずいぶん可愛い時期があつたもんだ」と言い、女将さんが「今だつてこの子たちよりも十分いけるよ」と一部始終を聞いていた女二人を顎でしゃくり上げながら言うと、女二人は「女将さんにはかないません」と顔を見合わせて笑い、親方も豪快に笑つた。小太りの男と話していた男も、相手の話しよりも後ろの方に聞き耳を立てていたので、少し笑みがこぼれ、真面目な話しをしていたつもり的小太りの男は「真剣に聞いているのか」と声を裏返すのだつた。

？

入口から一番近いところのカウンター席、L字型の角のところに座っている色黒の男も会話には加わらないものの話は聞いていて、口もとが少し緩んでいた。この男は漁師で、顔に刻まれた皺は老いよりも自然と過ぎ去っていく過程で、付いてきたものだった。漁師の父親も漁師で、女将の父親と仲が良く、父親はよく魚を女将の家に持って行っていた。漁師はよく父親に連れられて女将の家へ行くと、お礼にと女将の母親がくれるお菓子の味を思い出すのは、女将がまねに客に出すお菓子を食するときで、そのあつさりとした味が甘いものが好きではない漁師や他の男性客にも好評だった。漁師は、女将が十五のときまではずっと同じ学校に通い、その後は父親の後を継いで漁師になった。親子で船に乗った期間は短く息子が漁師になって二年ほどしてから、父親は体を悪くしたために引退し、女将の家に魚を持っていくのは自分の役目になった。そのころには女将は家を出て市内の学校の寮に入っていた。

数年後、学校を卒業した女将が町に戻ってきたとき、傍らには主人となる男も一緒だった。すぐに結婚した二人は店を開き、旦那が魚をどこから仕入れようかと考えているときに、いつも魚を持って来てくれていた漁師を勧めたのは女将だった。話を受けた漁師は快く了承し、ほとんど毎日、新鮮でその日一番いい魚を他のどこよりもまず女将の旦那の店に持って来てくれた。主人も漁師も口数こそほとんどとど交わさないが、お互いの仕事に対する意識には同じものを感じているらしかった。漁師が魚を持ってくるようになってから半年が過ぎたころ、主人から今日の夜店に来てくれるように申し出があり、漁師がその夜店に行くと、いつもの閉店時間までにはまだ一時間以上あるにもかかわらず女将と主人は看板を下ろした。女将が「いつもいい魚を持ってきてくれるから今日はささやかながら二人からのお礼よ」と言い、料理を運んできた。その日は漁師の誕生日だ

ったのである。その日出されてくる料理は漁師がはじめて食べる物ばかりで、メインディッシュの魚料理を食べたときには、自分が獲ってきた魚がこんな風に調理されることに漁師は驚き感動しながら舌鼓をうった。ディナーの間、主人はずっと厨房にいて、漁師の話に相手は女将が勤めていた。「お父さんは元気？」からはじまり「魚は昔に比べてどう？」など質問が矢継ぎ早に飛び出し、その中には「結婚しないの？」と言うのも含まれていたが、漁師は首を横に振るだけで、あまり多くを語ろうとはせず、女将の話の聞き役にまわっていた。料理が終わり、店を出るときには主人も厨房から出てきて、漁師を見送った。漁師がお礼を言うと、主人は「明日からもまたお願いします」と帽子を脱いで頭を下げ、女将はお土産にと自分を作ったお菓子を渡した。それから、毎年漁師の誕生日には店は早く閉められ、たった一人のためのディナーが催された。メインディッシュは決まって魚料理で、お土産にはお菓子が手渡されたが、主人と漁師は帰りのときに挨拶する以外、ディナーの間女将が話し相手なのはずっと変わらなかった。同い年の漁師と女将は一回りほど離れて見えるが、それは漁師が老けているというより、女将が若々しいのである。確かに若いころに比べるとふくよかになり、目尻や口もとに細かい皺があるが、女将の立ち振る舞いなのか内面から滲み出るものなのか、まだ若いころの面影が随所に見られたし、少なくとも女将と同世代の町の女に比べたら、嫉妬をかうぐらい魅力的だった。漁師の男の席からは女将の横顔が眺められ、彼は十二、三のとき二人で女将と釣りにいったときのことを思い出していた。元々は漁師の父親が女将に約束したものだだったが、当日に漁師の父親はどうしても船を出さなければならなくなり、父親から「陸から釣るんだからお前が連れてつても大丈夫だろ」と半ば無理やり役目を押し付けられたのである。釣り場までの移動の間、漁師はずっと黙り込み、この光景を誰か同級生に見られはしないかと辺りが気になって仕方がなかった。女将の数歩先を行くために速く歩くのだが、女将もそのスピードに合わせて小走りになるので女将を振り切るこ

とは出来ず、しかも女将は漁師に質問も交えて次々と話しかけ、彼が黙っていても口がとまらないのは後年、毎年行われる誕生日のときと同じだった。釣り場に着き、漁師が女将の分も竿に針や重りを取り付けてあげたが、餌ぐらひは自分で付けてもらおうと、自分がやるのを見てくれ、と言いオキアミを針に通したが、女将は「においがつくのが嫌だから私の分もつけて」と自分の針を漁師に差し出した。漁師は怒るよりも呆れながら、女将の分にも餌を付けてやり、竿を投げた。それから、どれくらい時間が経ったのか、二人の竿は少しも動かず、女将は全然釣れないという不満も最初だけで、後は退屈そうにほとんど動かない竿を見ていて、ときおり「釣れないわね」とこぼしたりするが、相手に反応はなく、じつと海面を見つめているだけだった。漁師は、数分おきにリールを回して餌が付いているか確認し、無くなっているとまた餌を付け竿を投げるといふ動作を繰り返して、同じことを女将の竿にもしてやるので、女将はただ渡された竿を持ってぼんやりしているだけだった。よく晴れた初夏の日中、陽射しを反射しながら海面はゆるやかに波打ち、空に眼を向ければ青い下地のところどころに浮かぶ白い雲が二人の時間とは関係ないかのように流れていた。ときおり吹く風が海面を震わせ葉の擦る音が鳴り、二人の竿をしならせるが、それが当たり前でないことは漁師がリールを巻かないことから女将にもわかるのだった。漁師がグツと竿を上にあげリールを今までにない勢いで巻きだした。女将が「釣れたの？」と聞けないぐらい漁師の顔には鬼気迫るものがあった。何回転もリールを回した後、海面の底から白い影が現われ、やがて海上に輝く姿を現した。地上で魚はバタバタと暴れ、女将はそのまま海に落ちてしまうのでは、と心配しながらも、初めて見る光景に興奮していた。漁師は息を切らしながら、魚から針を外しバケツに入れた。「釣れてよかったわね」という女将の言葉と笑顔に、漁師もその日はじめて表情が和らいだ。その後二人は女将の母親が持たせてくれた弁当を食べ、そのときには漁師も女将と会話を少しずつ交わすようになっていたが、午後の釣りでは、また魚が

掛かる前と同じ光景が繰り返され、陽射しと空だけが刻々と変化していき、日が水平線に隠れ始め、空と雲が赤く染まりあがる頃に二人は家路に着いた。女将の家のところまで来ると漁師は釣った魚が入ったバケツを渡し、「ありがとう」と言う女将の言葉に小さくうなずき、振り返って走り出した。それから先二人だけの時間というのは二度と訪れることはなかったのである。

？

…「ですよね」漁師は隣りにいる陽気な成年が話しかけているのに、始め気がつかず女将に見とれていた。漁師が成年の方を向くと、もう逆の方に振り返っていて漁師が一番奥に座っている左頬にアザのある男と目が合った。アザの男も漁師もすぐに視線を外し、漁師は女将の方をずっと見ているのを気付かれたかな、と思った。アザの男が座っている入口側の一番奥の席は、本来漁師の指定席だった。それをいつごろからか、反対の席の老人と反りが合わなくなったアザの男が奥の席に陣取るようになったのである。漁師はあの席がよかったがかと行って、相手に言うほどこだわりがあるわけではなかった。さほど気にせず今座っている席に落ち着いたが、アザの男から一度ビールをご馳走になってもらったことがあり、それが席の代価ということなのだろうと納得した。

陽気な成年がカウンターの下でゴソゴソとだしギターケースを引っ張り出し中からギターを取り出すと、カウンターを背にして座り、軽く弦に触れた。その音で店内の誰もがおっそろそろこんな時間かと思いついた。入り口の二人組みは指笛と高い声で成年を盛り上げ、材木屋の拍手に女二人もつられて手を叩き、姪は空いた皿やグラスをそそくさと下げながら、見習いが寝てるところまで行き、「あの人がはじめのわよ」と耳打ちしたが、見習いは相変わらず虚ろな視線で天井を見つめていて反応はなかった。見習いはぼんやりとする意識の中でも先ほどのギターの音色を聞き逃してはいなかったが、それが夢なのか現実なのか分からなかった。先生が老人に「彼がはじめますよ」と言ったが老人はチラッと対角線の先を見ただけで、視線を落としたのはアザの男と目が合うのを避けたかったからだった。

拍手や歓声が止み静かになったのを見計らって、ギターを持った成年が曲を弾き始めた。ゆっくりとしたテンポの曲調に話すときよ

りも太くてやや低い声が重なり店内に響きわたった。親方は椅子に深くもたれ掛かりながら目をつぶり聴き入っていて、若い娘のうち短い髪の方は成年の弦を押さえる指に、長い髪の方は声が伸びる度に動く喉ぼとけにそれぞれ注目し、小太りの男はテーブルに肘を立てて手の平を枕に聞いていたが、目がだんだん閉じかかろうとしており、相棒は小太りの男を背に成年の方を向き、足でリズムをとっていた。二人組みはコソコソ会話をしていたが、それがだんだん大きくなると、材木屋と女将にキツとした視線で咎められて大人しくなくなり、その光景を見ていた成年は演奏をはじめてからいつもより厳しくなっていた（というよりも笑顔だから普通にしているとそう見えるだけなのだ）表情を和らげ、微笑を浮かべて一曲目を終了した。しばしの沈黙の後、拍手と歓声が店内に響き渡り、中でもあの二人組みが大げさに手を叩き奇声を発しているのは、先ほどのことに対する謝罪の意識も込められているのだ。老人も拍手を小さくしているが、カウンターの下に手があるので気付いたのは外国語で「すばらしい」と言う意味の単語を発している先生だけだった。小太りの男はハツと目を覚まし、みんなより遅れて拍手をし、夢と現実を行き来していた見習いは、歓声と拍手で現実に引き戻された。後から入ってきた男も精一杯の拍手と歓声を送っているが目には涙が浮かんでいて、それに気付いた初老の男はさっきまで男の会話を疎ましいと思っていた自分に多少の罪悪感を覚え、女の方は拍手をして成年を讃えているようでその実、成年の後ろの壁に掛かっている時計を見ているのだった。成年はいつもの表情に戻り、手を上げて歓声に応えると若い娘二人の方を見て投げキッスをしたので、二人とも顔を見合わせて笑い、アザの男はやれやれといった表情を浮かべているが成年は背中を向けているので気付いてはいなかった。

？

拍手が鳴り止まないうちに成年は次の曲を弾き始めた。さつきよりも指が忙しなく動きだすとテンポもずっと速くなり、皆の拍手はそのまま手拍子になっていった。二人組みは立ち上がったて全身を動かしてリズムをとり、曲の間奏のところでは歓声や指笛を鳴らし、若い娘達も座ったままだが音楽に合わせて体を揺らし、材木屋は先生と乾杯した後「じいさん飲んでるか」と老人に語りかけた。小太りの男の相棒が床を踏むテンポをさらに速くすると、それを見ていた小太りの男も誘われるように足でリズムをとるが、男とは違い成年のギターとはテンポがずれていた。姪は曲に聞き惚れていたが、女将の視線の合図に気付くとそれぞれのテーブルを回り空いている皿やグラスの他に、もう手をつけないであろうものも下げだした。みんなのノリが良くなってテーブルの上の物が落ちないよう備えているのである。アザの男は、こいつはギターを弾いてるときが一番良い顔をしているな、と成年の垣間見える横顔を見ながら、正面の姿を想像していた。漁師は皆に成年が見えるようにと、椅子を下げて二人組みのテーブルの方へ移動した。痩せてる方がグラスに酒を注いでくれ、漁師は礼を言ったが喧騒にかき消され恐らく相手には聞こえてはいなかったものの、グラスをさし出すと二人とも乾杯をしてくれた。役所の男は演奏が始まってからは成年の方に向きを変えていて、親方は店内の光景と前の主人の写真、交互に目をやりながら一人感慨に耽り酒を飲んでいた。見習いは店が一気に騒がしくなったので、目は完全に覚めたものの、まだ少し天井が回っているように感じられる中、天井の隅のところに蜘蛛の巣が見えたので、目を凝らして蜘蛛を探そうとするが、たとえ意識がはっきりしていても蜘蛛の姿を見るのは難しかった。見習いは「冬場に蜘蛛はどうしているのだろう、あの巣の中心でじっとしているのだろうか」と考えながらシャツのボタンを一つあけた。背中では毛布を背にしてい

る分少し汗をかいていて、そうでなくても店内は自分がここに運ばれるときと比べても暑く感じられた。思いきって起き上がってみたが、まだフラフラして視界がぐらつくので立ち上がりはせず、椅子に体をあずけ斜めにもたれかかっていたところを他の者が音楽に夢中で気が付かない中、女将が気付き姪を手招きで呼び見習いを指差すと、音楽に夢中になっていた姪も、慌てて厨房からグラスに一杯水を入れ向かうのだった。姪が「大丈夫？」と声をかけ、グラスをさし出すと見習いはよほど喉が渴いていたのか、グラスを受け取る と一気に飲み干し、ハア一と一息ついてからお礼をいい「もう一杯もらえるかな」と姪とは視線を合わさずに言っていると、姪は水差しを持って、見習いのところへ戻りグラスに水を注いだ。見習いが店内を見渡すと二人組が立っているのが奥に見え、ギター引きの姿は材木屋と女将さんに隠れて弦を押さえる左手だけが上の方にくるときたまに現われ、一番手前にいる老人は、見習いが起きたのに気付いた先生が手を振ると、つられるようにこつちを見たがすぐに興味なさげに振り返り先生に何やら耳打ちしたようだった。姪は水差しを持ち立ったまま、益々盛り上がっていく店内の雰囲気に合わせて体を揺らせていて、見習いがその姿をしばらくじつと見ていると、絡みつく視線に気付いた姪は見習いと目が合い、無意識のうちに体を激しく動かしていた自分を思うと急に恥ずかしくなり、かといって動きを止めるのも不自然だと考え、徐々に体の動きを小さくしていった。見習いは、そういう意味で見えていたのではなく、ただ見とれていただけなんだ、とは言えるわけもなく、自分も姪の手拍子に合わせて手を叩きはじめるのだった。それをチラチラと微笑まじげに見ていた先生は、おかしくも愛らしくも感じ、声を上げて笑い出し、音楽とは関係なく手を強く叩き「若いっていいものですね」と老人の肩に持たれ掛かって言うので、老人は先生の豹変に驚き困惑するのだった。

?

姪と見習いは冷たい風が入ってくるのを肌を感じ、ここからだ
入口のところは見えないが、誰か入ってきたのだなと思った。姪は
この時間だと誰か近くの家に住む人のお迎えなのだろうと思ひ、そ
れが大方、今自分たちから一番近いところに座っている老人の娘な
のだろうと推測した。ギターを弾いている成年も含め、皆が入り口
の方に注目する中、入ってきたのは姪の想像通り老人の娘で、中の
熱狂にやや間を外した感を受けながらも申し訳なさそうに「父はい
ますか？」と音楽の邪魔にならないよう、カウソウの中にいる女
将さんに口の動きと表情で尋ねた。女将が、目線で教える間でもな
く娘は父のいる場所へと向かっていった。通路を横切るとき「すい
ません」と前屈みになりながら、二人組みや役所の男の前を通り、
親方の前では一度立ち止まって挨拶し、親方も軽く手を上げてそれ
に応えた。小太りの男たちの前を通り、先生のところまで来ると、
先生が頭を下げたので、娘も「父がいつもお世話に」と頭を下げた。
先生は材木屋のところになり、娘の分のスペースを作ろうとしたの
で、娘は「結構です結構です」と言いながら、チラツと父親を見る
と、娘の方を見ていて、娘は長年の付き合いから、もう少し店にい
たいのだなと感じて、さてどうしようかと考える間もなく姪が「
こつち」へと自分たちがいるところへ手招きしたので、娘はようや
く表情も和らぎ誘われるがまま奥の広間の六人がけのテーブルの椅
子に腰掛けたのである。見習いは入口から入ってくる冷気に心地よ
さを感じたのも束の間、テーブルを挟んで前に座る老人の娘を意識
し、また体が熱くなるのを感じるのだった。見習いが軽く頭を下げ
て挨拶をすると、娘は見習いの様子を見ただけで酔っているのが分
かり「大丈夫？」と声をかけた後、カウソウの方に向き父親の状
態を確認していた。見習いはうなずくだけで言葉を発しはしなかつ
たが娘から視線は外さなかつた。姪は見習いのその様子を見ていて、

少し機嫌を悪くしたが、隣りを見ると長いまつ毛と鼻筋が高く通った横顔に溜め息を出さずにはいられず、見習いが「どつしたの」と小さい声で聞くと、相手を一瞬見たあと軽く鼻で息を鳴らし口を尖らせ立ち上がると水差しを持って厨房へ行ってしまった。

？

最後に弦を激しく弾く音がして演奏は終了した。成年が拍手と歓声にわざとかしこまって応えたので、その場違いなしくさが可笑しくて一同は笑い、女将は「相変わらずサービスピ精神旺盛な子だわ」と好感を持つが、成年自身はギターを弾くとき、集中し過ぎていつものふざけたノリが出ないので、演奏が終わった後にこういう態度をとるのは一種の照れ隠しだった。成年は「しばしご歓談を」と言つて立ち上がりギターを椅子に置くと、入口の側の手洗いに入つていった。アザの男は目の前のギターを見ていて、弦をそつと人差し指で弾いてみた。音は鳴つたが小さくてほとんど聞こえなかったのでもう一度、今度はさつきよりも強く弾くと思つたよりも大きい音が鳴り、何人かの視線を集めてしまい、アザの男は驚いてギターから手を離すが、位置から見ても彼しかギターに触れた者がいないのは明らかだった。奥にいる見習いと老人の娘は、ご歓談をと言つた成年がもう演奏を再開するのだと思ひ、老人に帰る催促をしに、立ち上がるうとした娘は浮きかけた腰をまた椅子に沈めるのだった。見習いは演奏が続いている間は、娘は老人を連れて帰らないのだと思つたので、成年にできるだけ長く演奏をして欲しいと思つていたが、成年は手洗いから戻つて来てはいないので、さつき一瞬鳴つたギターの音は続きはしなかった。娘は曲がはじまらないことを確認すると、父親の側に行き、耳元で「お父さん帰るわよ。今日はちよつと飲みすぎなんじゃない」と囁いたが、老人は娘と視線を合わさうとせずグラスに手をのぼそうとするので、娘は「お父さん！」と語気を強めて言った。すると先生が「帰りは私が送りますから心配なさらなくてもいいですよ」と言つと材木屋も「俺も付いてるから気になさんな。一人担ぐくらい大丈夫さ」とシャツの袖を巻くりあげ、盛り上がった筋肉を見せた。娘は先生には、申し訳なさそうな表情で「いいんです、いいんです」と返事をしたが、後ろの材木屋

には「大丈夫さつて、そういいながら、よくどこかでつぶれて寝てるでしょ。この時期道で寝たりしたら凍え死ぬわよ」と先生に話しかけるときよりも低く強い口調で言ったので、先生はその変わりように可笑しくて笑うと、娘もハツとして視線を下げた。材木屋は「この違いはなんでしょうなあ」と手を先生の肩に掛け、頭越しに娘を見ると、娘は材木屋をにらみつけた。すると自分が笑ったのが原因だと思った先生は謝り「ちがうんです、ちがうんです」と娘は慌てて誤解を解こうとするが、後ろの材木屋はその慌てふためきぶりが可笑しくて先生の肩を叩きながら豪快に笑った。娘は呆れた顔で溜め息をつき、父親の方を向くと「この一杯だけだからね」と言つて席に戻った。見習いは心の中で「もつとゆつくり飲むんだじいさん」と願わずにはいられず、姪は、見習いの視線がさつきから娘に向いていることに益々機嫌を悪くするが、娘が入ってくるまでは見習いの視線をいちいち追っていたわけではなかった。女将さんの「もう帰るの」と言う声に姪は振り返ると、初老の女が立ち上がりバッグから財布を取り出していた。初老の男は自分が支払おうとポケットに手をのばしたが、それはあまりに差し出がましいまねではないかと迷つてるうちに女は支払いを済ませ、女将と会話を交わし、他の常連客や隣りの男に挨拶をした後、初老の男に「では、また」と言つて入り口へと歩いて行つた。入り口のところまで待つていた姪からコートを受け取りドアを開けてもらうと、雪が降っているので、女将さんが「傘、借りていきなよ」と言つたが、「近いからいいわ」と言つて、振り向きざまに女将さんと姪に手を振り、ドアが閉まる直前にはずつとこつちを見ていた初老の男と目があつた。

男は閉まつたドアを尙も見ていたが、急に「女将さん勘定を」と言つと、ポケットから財布を取り出した。女将は勘定を言つて代金を受け取つたあと、お釣りを渡すときに、男の方に顔を近づけ「彼女は大人しい性格だけど、ああ見えてなかなか頑固なところがあるから、小学校の頃から一緒だからねえ・・・まあ、積極的にね」と男に小声でいい、男は気恥ずかしそうな表情で女将や皆への挨拶も

そこそこに席を立ち、上着を羽織ると、まだ入り口のところにいた姪に「傘を貸してもらえるかな」と言い、姪の応えを待つまでもなく傘立ての中から白地に赤や黄色や水色やオレンジの水玉模様が入った傘を一本抜き出すと勢いよくドアから出ていった。姪は自分のお気に入りの傘を持っていかれたことよりも、いつもどちらかと言うと地味で大人しい男の初めて見る力強い眼差しに圧倒され、呆然と閉まりゆくドアを見ていた。女将さんはやれやれといった表情で男の後姿を見送り、真ん中の男はこの短時間に話し相手がいなくなってしまうことに、自分が一方的にしゃべりすぎたせいだろうかと反省し、漁師と親方を除いた他の客は、二人が続けて帰ったことには時間も時間なので特に気にした者はいなかった。女将は親方がニヤニヤと自分を見ていることに気付き、その視線は「お前さんもとことん世話好きだな」と言われているようだったので、女将は口元に笑みを浮かべて「年も年なんだから誰かが後押ししなきゃくっつかないだろ、あんたんとこの子とウチのとはちがつてさ」と思っていたが、親方は後の二人のことはさほど気にしていなかった。漁師はこの席にいて一部始終を見ているので、女将の変わらない性格に感嘆しつつ、女を追いかけていった男に激励を送らずにはいられなかった。

通りを歩きながら女は、思ったよりも振っている雪に「やつぱり傘を借りればよかったかしら」と思いながらコートの際に首をうずめた。店から出ていった男は、路地を曲がって大通りに出たところで女に追いついた。雪はまだ地面を完全には覆っていないもの、ところどころ積もってきており、女のところで立ち止まろうとした男の足を滑らせ、男はバランスをくずして転びそうになるところを女の肩にしがみつき何とか体勢を立て直した。男は「すみません、すみません」とすぐに手を引っ込めあやまったが、女は特に気にした様子もなく「どうしたんですか？そんなに慌てなさって」と、男を落ち着かせるかのように穏やかな口調で話しかけた。男は「いや、あの」と息を切らせながら考えるが、用件などあったのだらうか、

ただ勢いで追いかけて来たただけだったのでは、と数十秒前の自分の記憶をたどるが、やはり用などはなくただ追いかけて来ただけなのは考える間でもなく明らかだった。こんなとき、あの陽気な成年ならば何か冗談でも言っただけを和ませることが出来るのだろうか、と取り止めもないことが頭をよぎっていると、女が笑っているの。男は何がおかしいのだろうか、女の視線の先を追って見るとさつき転びそうになったとき思わず離してしまった傘があった。「これ、あなたの？ずいぶん可愛い柄ね」と女は軽い口調で言い、それが男には緊張を和らげるきっかけになった。傘を拾い上げ、「いや、これは急いでたもので、とりあえず店にあるのを借りてきたのですが、いや、ははっ、まさかこんな柄だとは」二人は顔を見合わせて笑い、男は傘を開き女の頭上に掲げた。「家まで送ります」という男の言葉に女は普段なら「すぐそこですから」と断つただろう。しかし、今は自然と出てくる笑みで応え、それが承諾につながっていることは二人が色とりどりの模様の中を並んで歩いていることから分かるのだった。雪は静かに夜の通りに舞い降り、少しづつ街を白く塗り上げようとしていた。街灯が照らし導く大通りには、二人以外に後にも先にも人影はなく、並ぶ家々の何件かからわずかにもれる光が、静寂に包まれた世界で、まだ眠りについていない人々がいるのを知らせてくれるのであった。大人二人が入るには小さい傘は、男の右半分まで雪を除けてはくれないが、今となってはむしろ男は降り続く雪に感謝せずにはいられないくらいだった。後数十メートル先にある十字路を右に曲がれば女の家はすぐそこだ。男はこの大通りがどこまでも伸びてくれればいいと考えながら、女の横顔を相手には悟られぬようにチラチラ見ながら無言で歩いていくのだった。

？

店の中は慌ただしくなっていた。姪と老人の娘は奥の六人掛けテーブルの上にあつた食器やグラスを次々と厨房へと運び、男達はそれぞれのテーブルを壁側に寄せ、上に置いてあつた物を全部力ウンターに移動し、片付いたテーブルから順に娘二人組みが女将から手渡された布巾で拭いていくと、最後にまた男連中が椅子をテーブルの上に掛けていった。見習いも手伝おうとして立ち上がったが、女将から「無理しなくていいから座つてなさい」と言われたものの、一番若い自分が動かなくてはと思うが、老人を除いた中ではただ一人同じ位置から動かない親方の方を見ると、うんうんと見習いのほうを見て頷いているので、見習いは手伝わなくていいにしても、さすがにここには作業の邪魔になると考え、入り口側に座つている役所の男の方へ行つて、もうテーブルの上に掛けてある椅子を一つ降ろして腰掛けた。役所の男が「気分は大丈夫かい」と言つて、コップに水を注いでくれたが喉は渴いてはいなかったものの、せっかく注いでくれたのだからとグラスを口につけただけで飲み込みはしなかった。老人と役所の男、親方、見習い意外の者は手伝つたので六人掛けのテーブルの上にはもう物がなくなつていて、今度はそれを持ち上げるために先生、材木屋、二人組みがテーブルの四隅に立ち、材木屋の合図で持ち上げると、カウンターとテーブル席の間の通路に置くため、テーブルを横にしようとするが四人の意思が統一されず右に左に回すので、本人達も皆もそれが可笑しくて店内には笑い声が広がった。結局材木屋と先生が持つてる側が前になり通路といっぱいっぱいの面積をとるテーブルを何とか入れ込んだ。しかし、これでは人が通るスペースがないので、今度は親方の指示で四人掛けのテーブルを入り口側に移動させると、奥との行き来に支障はなくなつたが、ドアを開けるとすぐテーブルがある状態になるのは仕方のないことだつた。

テーブルがなくなると奥のスペースはかなり広く感じられ、角に置いてある花柄の布を被せられた物の存在が際立った。エプロンを脱いだ女将が花柄の布を取ると、現われたのはピアノで、女将は椅子に腰掛け蓋を開け、姿勢を正し、スウーと深く息を吸って吐き出すと、鍵盤を一つ鳴らした。高い音色が響き渡り、だんだん小さく弱くなりそして消えていった。親方と老人以外は皆、ピアノのある所に集まって来ていて、立ったままの者もいれば椅子を持ってきて座る者もいた。

女将の指先が鍵盤を叩いていくと高い音や低い音、はつきり聞こえる音や、聞きわけられない音が響き合い、それが一つの音楽を作り出し、真剣に聴き入る者もいれば、あまり集中していない者、目をつぶり、曲がそうさせるのか物思いにふけっている者と皆それぞれ勝手気ままに音色の中に浸るのだった。

役所の男は夫婦で住むには広い我が家のことを考える。まだ、木や花が多くは植えられていない庭を通り、装飾が施された重量感のありそうな扉を開ける。多くの来客者を予想して広く作った玄関だが、定年してからは勤めていたところのように役所の同僚や部下が訪れる機会はそうないので、今は妻が近所の奥様方を相手に週に一回主催している編み物教室のときだけ、この広い玄関は履き物に埋め尽くされるのである。入り口から右に行くと大きい窓から光がたくさん入るよう設計された自慢のリビングがある。妻がどうしてもと言って買った外国製のソファアが丸長のガラステーブルを囲み、壁の本棚には自分が趣味で集め続けた画集が並んでいる。ホントに好きな画家以外は安く買えるように古本屋を巡ったが、いざ実物を手に取って見ると結局値段などは考えずに次から次へと買っていく、帰りは重い紙袋を抱えながら家路に着くことになり、家では妻の小言が待っているのである。前の家ときはこの画集の置き場所に困ったが、リビングにはまだ本棚を置けるスペースが十分にあり、置き場所の心配をしなくてもいいことがより収集に拍車をかけるのだった。玄関を入ってすぐ目の前には二階へと続く階段があり、夫婦ははじ

め一階にある自分たちの寝室で寝ていたが、二階を息子夫婦が帰省して来るときだけにしか使わないのはなんだかもつたいないと思い、家が建つてから一ヶ月もしないうちに二階で眠るようになった。二階のベランダは広めに作っており、そこで画集を見るのが役所の男のお気に入りだった。ふと目を見上げれば並ぶ家々の屋根があり、そう我が家よりも高い家がないのは気分がいいことだった。やや離れたところに見える他の建物より頭二つ三つ分高い古風なレンガ造りの建物が、男が長年勤めた役所だった。自分の後を引き継いだ彼はうまくやっているだろうか、新人だったあの子は町の人にきちんと対応してるだろうか、と職場での日々が次々に頭をよぎっていき、机の配置やロッカーの脇に積まれた整理されていない資料、自分の席の窓から見えた広場の大きな銀杏の木など、全ての光景は何一つ変わってはいないだろうか、そこに自分はいないということを不思議に思いながらも、今まで定年していった人達も同じように感じたのだろうと、また画集に目をやるのである。

？

老人はカウンターの一番端なので席を移動することなく、向きを変えただけでよかった。女将の弾くこの曲を老人はもう何度となく聴いているので、頭の中では正確に曲が再現できるようになっていて、老人はよく口ずさんでいたが、まわりはただぶつぶつ独り言を言っているだけだとしか思っていなかった。老人はこの曲が流れ出すと遠い少年の頃からの記憶が蘇える。なぜ、そうなるのか、恐らく女将が決まっつて一番始めに弾くこの曲は昔からあるもので、老人が幼かったころ。よく学校で流れていたのである。老人は子供の頃からずつと成績優秀で、まだ町から大学に行くことが珍しかった時代に名門と言われる都会の大学への入学が期待されるほどだった。しかし、家が貧しかったため（というよりその頃は皆が貧しかったのだが）進学は断念せざるを得ないだろうと老人は考えていたが、ちよつと見合わせたかのようにその年から、大学側が入試の成績優秀者には学費を大幅に免除する制度を開始した。老人はそれこそあらゆることを忘れて勉強に没頭した。老人にはこれが何か、決して彼自身は信心深い方ではなかったが、運命的な何かしらの大きな力が自分を後押ししているにちがいないと思ひ込んでいた。老人は見事大学に受かり学費も免除された。町を出るときも感傷など少しもなく、自信と期待に満ち溢れ輝かしい未来を思ひ描いていた。汽車の窓から見える風景が次々と通り過ぎていく中、老人は生まれ育つた町を見ながら思った。もう戻ることはないだろうと。うたた寝をしていた老人の肩を揺する者がいて目を開くと娘が自分をのぞき込むように見つめていた。娘は「もう帰る？姉さんと義兄さんも心配してるわよ」と言ったが、老人はなぜか今夜はまだ帰る気にはなれず「あの男がいる家になんぞ帰る気にはなれん」と娘に言った。娘は「また、はじまつた」と呆れながらも老人を説得し、最後に孫の名前を言つと老人もしぶしぶ納得した。これを飲んだら帰ることを

約束して、さつきからあまり減らないグラスを手に取ると、娘は「やれやれ」といった表情で席に戻っていった。老人は、姉妹のくせにあいつは姉と違って口うるさいものだ、娘の後姿を見ながら思った。曲は終盤にさしかかり、曲中で一番テンポが速くなるころだった。女将の指が鍵盤の上を次々と移動して行き、生み出される音色は幾重にも重なり現われては消えていった。二度と帰らないであろうと思ったこの町に老人は戻り生活している。あのとき、汽車の窓から見える風景を見ながら、大きく夢や野望に満ち溢れていたときの自分を思い出すとあの異常なまでの気持ちの高まりはどこへ行ってしまったのだろうか。あれが若さというものなのだろうか。それにしても、記憶の中で若いときの自分を思い描くとき他人を観察しているようにしか感じられず、それが自分自身の体験だという実感が湧かない。汽車の窓から見た町の風景は、低い家々が立ち並び、汽車が動き出して数分もすると平野が広がった。大通りといえるほどの舗装された立派な道はまだなく、人も建物も今よりずっと少なかった。そもそもここはあの頃町ではなく村だった。今、汽車の窓から見える風景は昔自分が見たものとはまったくちがっているのだろうか。町は変わった。いや町だけでなく自分も変わった。都会から帰って来たからだろうか、結婚して娘ができたからだろうか。孫もできた。流れるこの曲だけは昔のままだ。曲はゆっくりとしたテンポになっていき、女将が最後の鍵盤に静かに触れ、音色は店内に広がり消えていった。しばしの沈黙に浸る間もなく、二人組みが歓声と拍手を送ると、皆もそれに続き店内はこの日一番の喧騒に包まれた。老人もグラスを置いて手を叩きながら大きくうなずいていた。振り返った娘と目が合い「もう行くわよ」と声は出さずに口の動きだけで言う娘に、老人はそのままうなずき続けた。娘が立ち上がり、老人も帽子を被り立ち上がるうとすると、陽気な成年が「もう帰るのですか、これから楽しいっていうのに」とギターを抱えながら言った。娘は「これから踊りの時間なんだわ」と察し、老人の顔を見た。老人は、別にまだいても構わないというのを示す

ように、帽子を脱いでカウンターに置くと再び席に付いた。娘は踊るのがとても好きなのである。娘は「お父さんごめん」と言っているが、テーブルを移動させていた時点で多少の期待は抱いていたのである。さっき座っていた場所に戻ると、もうみんな椅子を壁に寄せ踊るスペースを作っていた。陽気な成年と女将はそれぞれの楽器を小さく弾きながら曲の打ち合わせをしていた。

？

姪は女将の演奏がはじまってからすぐにテーブルにうつ伏せになって寝てしまった見習いのところに行き「ねえ、踊りがはじまるわよ」と耳元で言うが、声をかけるだけでは見習いに起きる気配はなく、呼吸する度に肩が上下するだけだった。姪は見習いの肩を揺すって起こそうとするが、遠慮気味になってしまうのは、さつき起こしたときの一件があるからだ。奥から二人の方を見ている先生には姪が見習いの肩をさすっているようにしか見え、同じように二人を見ていた老人の娘も「仲のいい二人ね」と先生と顔を見合わせ笑うのだった。

二人組みは向かい合って立っていて、何か踊りのステップの確認をしているようだが、二人ともまったく合っておらず、お前が悪い、いやお前のリズム感に問題があるんだ、とお互いに罵りながら足をバタバタ動かしていた。そこへ材木屋が二人の間に割って入り「こうだこうだ」と二人よりもかなり豪快に手も交えながら床を踏み出すと、二人とも足を動かすのをやめて、ポーツと眺めるので、材木屋も少し恥ずかしくなったのか「お前らも踊るんだよ」と、二人の肩に組みかかった。二人もしぶしぶ材木屋のステップに合わせ足を踏み出したが、痩せた男は材木屋より背が高いのにもかかわらず強引に肩を組んでくるので屈み気味になり、出っ歯の方はホントに不満そうな顔で、その光景がいかにも材木屋に無理やり付き合わされているという感じで可笑しく、娘二人は口に手を当てて笑っていたが、そのうち堪えきれずに大きく笑い出し、材木屋が「何がおかしいんだよ」と言うと、皆が笑った。

小太りの男ともう一人は、女将たちが何の曲からやるのか予想を立てていたが、さつきから男がチラチラと娘二人組みの方を見ているのにとづくに気付いている小太りの男が「なんだったら俺と一緒に踊ろうと話をつけてこようか」と言ったので「いや、そうじゃない

んだ」と男は言いながら「いくらなんでもお前に話をつけてもらう
つていうのもなあ」と丸々とした体を上から下に見て言った。小太
りの男が「バカだなあ、こういうときでも利用してチャンスだと思
わなきゃ、お前ずつと結婚できないぞ」と説き伏せるように男に言
うので、男もさすがに少し腹に据えかねたのか「誰が結婚の話まで
しろといった。まったくお前はガキの頃から、ほんとにオツサン地
味なことばかりだな」と語気を強めて言った。小太りの男も相手の
態度から少し言い過ぎたと思い一瞬黙ったが、自分たちは今年で三
十の半ばに差し掛かるうとしていたことを思い出し「そうは言つて
も俺たちはもう十分に中年だぞ」とニヤニヤしながら言つと相手も
アツとした表情になり照れ隠しにグラスを口につけた。男は手に持
つていたグラスをグイッと飲み干してから「今日はもう二人とも飲
みたかったなあ」と氷だけが入ったグラスを見つめて言った。言っ
た後に、さすがに今のは感傷的な言い方だったかなあと、小太りの
男を見たが相手は聞いておらず、材木屋と二人組みの踊りを見て笑
っていた。男は「フウ」と一息つくとお酒を作るために立ち上が
りカウンターの方へ向かった。親方が男を手招きして呼ぶので「ち
よつと待ってください」と、男は慌ただしく酒をつくり親方のとこ
ろへ行くと、座れと指し示すので、男はテーブルの上に立ててあつ
た椅子を降ろして腰掛けた。カウンターに座ると親方を見下ろす形
になるので失礼になると思ったのだ。親方は「最近どうだ、ちゃん
とやってるのか」という近況を聞くことからはじまり、他にも仕事
のこと、家のこと、そして結婚はしないのか、と言つことなどを聞
いてきた。男は曖昧な返事で何とかこの場を切り抜けようと考えて
いたが、親方の昔話になると「それはもう何度も聴いたよ親方」と
訴えたが「黙って聴け」と一喝され、見習いの方を恨めしそうに見
ていた。姪の呼びかけによろやく身を起こした見習いと目が合うと、
これはお前の役目だろ、と親方に見えないように手でこつちへ来い
と合図するが、見習いは視線を外し、男は親方に「ちゃんと聞いて
いるのか」と怒られ、小太りの男は「また捕まっているな」と笑い

ながら男の方を見るのだった。

？

男の実家は雑貨店や食料品店を営んでいて、この町だけでなく隣町にも店を持つ裕福な家である。男は地元の学校を出た後、大学に進学するために町を出るわけでもなく、かといって働くわけでもなくブラブラしていた。周りの友人には「今は将来大きなことを成すために必要な時間なのだ」と語っていたが、男が特別何かをやっているようには皆思っていなかった。それが三年ほど続き、見かねた祖父が同級生のよしみで親方のところで使つてやつてくれないかとお願いし、親方も若いやつを見るのには慣れてるからと安請け合ひしたのだが、男は一月も経たずに辞めてしまった。親方から言わせると、決して不真面目でも不器用というわけでもないのだが、一つの仕事を頼まれるとものすごく考えてからでないと動き出さないとこののが難点だった。男のところで作業が遅れるので全体の流れが滞ってしまうのである。他の者からも「アイツは悪いやつじゃないけど、この仕事には向いてないよ」と言われるが、親方も一度引き受けた頼まれ事をそう易々と投げ出してしまふ性格でもないのです。何度も仕事が終わった後、飲みに誘いその都度、口を酸っぱくして仕事の要領を教え説き伏せようとするのだが、この男はいつたんは納得したように見えるのだが、しばらくすると「でもね親方」と自分の意見を言い出し、それがまた説得力のある言い方なので、親方もしばらく聴いていると話題は仕事の話ではなく自分の日々疑問に思っていることや人生観などに移っていて、しかも合間合間に親方の意見を求めてくるので、親方も語るのが好きな性格だから、自分の生い立ちなどを話し始め、飲み終わる頃には仕事の話しのこととは遠い彼方についてしまつていたのである。そして、翌日も男のまつたく改善されていない仕事ぶりが目につくのだが、一ヶ月経つた後、男が自分から「ちょっと旅に出るので辞めさせていただきます。短い間でしたがお世話になりました」と親方だけでなく皆が集まっ

てるときに言い、一ヶ月続いたこの奇妙な時間も終わりを迎えたのである。皆は残念だなあと行っていたが、親方も含めて正直なところホツとしたというのが本音だった。男は一年ぐらいした後帰って来ると、またブラブラしながらたまに家の手伝いをしたりしていた。親方も男のことが気にかかるので、事あるごとに呼び出し飲んだりしていたが、それが何度か続くうちに、今度は親方の昔話に付き合わされる男の方が参ってきて何かと理由をつけて誘いを断るようになっていったのだが、この店でかち合うときは逃げ出すわけにも行かず、こうやって捕まると、もう今となっては自分がたどってきたようにすら感じる親方の昔話を聴かされることになるのである。

？

成年がパン、パンと手を大きく叩き、皆が注目するとギターを激しく一回鳴らした。打ち合わせが終わりいよいよ演奏が始まるのである。女将と成年は互いを見合いながら成年の足が床を踏む合図で演奏を開始した。かなり速いテンポの軽快な曲からなので、小太りの男は、いきなりこれからかと自分の予想が外れたのに驚きながらも、慌ててグラスをカウンターに置き、もう踊り始めている娘二人を手本にリズムを取ろうと、両手を上下に、重心は左右に揺れ動かしながら、漁師にも「踊りましょう」と誘うが、漁師は苦笑いを浮かべて首を横に振り皆のダンスを眺めていた。初老の男女に挟まれていた男は一番激しくステップを踏んで床を鳴らすので、女将が「抜けちゃわないかしら」とチラツと後ろを振り返ると、手にはグラスを持ったままだったので「グラスを置きなさい」という女将の注意も耳に入ってはおらず、足がもつれて転びそうにもなるので、娘二人は笑っているが女将の声に反応した漁師が男の手からグラスを取り上げようとする、男は漁師にもたれかかり二人はもつれ合つて転んだが、漁師はかろうじてグラスは手に持ったままで中身が少しこぼれて自分の顔にかかっただけだった。女将は演奏を止めて立ち上がり男たちのところまで行くと、起き上がってきた漁師にまず声をかけ、顔が濡れているのに気付くとポケットからハンカチを取り出そうとしたが、エプロンはカウンターの中に置いてきていたので、姪を呼ぼうとすると、すでに姪は側まで来ていてタオルを女将に手渡した。受け取った女将は、この子も気が付くようになったもんだと思いつつながら、漁師の顔を拭こうとするが、漁師は、いい、いいと女将の手を払いのけるように服の袖で顔を拭いた。「何を照れてんの」と女将の声に気圧され、結局は手をおろし、女将のされるがままになった。その間、倒れた男の方はうつ伏せになったままなかなか起き上がってこない、材木屋と二人組みが男を囲み、材

木屋が、「どつか打ったのか？」と手を伸ばし相手の腕を掴み起こそうとすると、男は材木屋の手を振り払い「ほっといてくれ」と言っつて、そのまま声をあげて泣き出してしまった。成年は女将が演奏を中断してからも音を下げたギターを弾き続けていたが、突然鳴り響いてきた大の男の泣き声に、指の動きは止まってしまった。周りの皆もこれには困惑し何と声をかけてやったらよいものかと男を見下ろしていると、漁師の顔を拭きながら、女将が「いいかげんになさい、死んじゃったものはしょうがないだろ」と語気を強めて言うが、「またすぐに生まれるわよ、あんたがこの調子じゃ亡くなつた鼠も浮かばれないよ」と最後の方は優しく語りかけるように言った。

？

男の家は代々、鼠には並々ならぬ関心（というより他人から見ればもうこれは信仰に近いくらいのものだった）を持っていて「鼠を敬うべし」いうのは先祖代々の家訓になっていた。この始まりはこの土地に移り住んできた開拓団の中に彼の先祖がいて、土地を開墾していくが、始めの二、三年は作物がほとんど収穫できず、山菜をとったり薪を町に売りに出てわずかばかりの食料品と変えていた。しかし、冬場は山菜は取れないし、薪は自分達が使えないので食べる物に困ることになった。政府からの援助は本当は食い繋ぐという言葉も当てはまらないくらいのもので、皆冬が過ぎるのをじっと耐え忍んでいる状態だった。そのため、大人はもとより子供などが病にかかるとまず助かる見込みはなかった。そんな中、開拓団としてきた男の先祖の子供三人のうち二人が流行り病にかかった。うち一人は寝込んでから五日目の朝を迎えることなく家のすぐ目の前にある、今は葉をつけていないが、春には鮮やかな黄色い花を咲かせる大きな木の下に埋葬され大地の一部となった。男の先祖は悲観にくれている間もなかった。もう一人の子の容態は明日にでもまた、雪で埋まった土を掘り返さなければならなくなってもおかしくない状況だった。開拓団の中にいた医者ではないが実家が病院だったという男に診てもらっても「何にしても栄養のあるものを食べさせないことには」というだけだった。男の先祖も栄養のあるものをなんとかして食べさせてやりたいが、食料と換えられそうなものは家の中を見渡してもなく、それ以前に隣町への道はここ数日の雪で鎖されていた。男は眠るときに「また明日あの子の苦しんだ表情を見るのか、いや、見れないときはもう天に召されてしまったときか。でも、これ以上苦しむぐらいなら、いや、なんて事を考えるんだ。でも、もうこれ以上は」と考えが廻るばかりで一向に眠りにつくことができなかった。暖炉から薪が燃える音が聞こえ

る中、男は一昨年前の春にここへ着いたとき、他の者よりも家作りに倍以上の時間を費やしてよかったと思つた。おかげで農地の整備は遅れることになつたが、その分他の家よりはずつと暖をとれる構造になつていたからだ。そんなことが頭を過ぎりながらも、息子をどう救うかに頭の中はほとんど支配されていた。天井裏でカサカサと音がする。あの鼠どもはこんな状況でもよくやつてるもんだ、と思ひながら暗闇の中様々な表情に見える天井の木目を見つめていた。「あれを食わせてみてはどうだろう」これは当時としては、まったく考えられないことだつた。鼠は不浄な生き物とされており、触ることすらもはばかられ、その駆除には特別な資格を持つた者しか（それを行う人達は軽蔑の視線を免れないことになるのだが）あたれないことから、どういう存在だつたかが推測できるだろう。したがつて食べるなどというのは論外といつてもよかつた。しかし、今となつては一人になつてしまつた息子を死なせるぐらいならと、男は鼠を簡単な仕掛けで捕まえると意を決して調理にとりかかつた。皮を剥ぎ、尻尾と頭の部分は切り落とし、十分に沸騰した鍋の中に入れ煮ていつた。グツグツと鼠の肉は鍋の中で踊り、他の肉を煮るときよりも長く煮ていたことから鼠への侮蔑の念がわかるというものだつた。十分に煮えきつた鼠の肉に塩で簡単な味付けをし、男は手でちぎつてしばらくそれを見つめ口に入れるのを躊躇しながらも、思い切つて口の中に投げ込んだ。一口、二口、と噛むと塩味の後からくる齒ごたえはあまり他の肉と変わらず、これならなんとか食べそうだと皿にのせ子供部屋へと持つていつた。久しぶりの肉とはいえ息子はもう食欲をほとんどなくしていたが、父親が熱心に勧めるので半ば無理矢理口の中に押し込んだ。それを一週間も続けると徐々に息子の体力は回復し血色も良くなつていつた。男は普段のときは、どんなに食料に困つても鼠の肉を食べることはなかつた。それは不浄の概念などではなく、本当に危機的な状況のとき以外は手をつけてはならないと思つたからだつた。こうして、この家では鼠を捕まえることはあつても殺すことはなく、山へ持つていつ

て放すことになった。それが世代を経ていくに連れて一種の信仰のようなものにまで昇華していったのである。はじめのころは不浄な生き物を大事に扱う家、と周りから気味悪がられ、村の行事ごとの参加の際に嫌がらせを受けたりもしたが、時間が経つにつれて鼠をそこまで不浄なものとする習慣もなくなり（それは鼠の駆除を行なう資格がなくなり普通に一般の家庭でそれぞれ駆除するようになったことが証明していた）鼠を大事にする一風変わった家というぐらいにしか思われなくなっていった。とはいえ、男は代々の先祖と比べても鼠を大事に扱いきるので、家のものでもやり過ぎだと思っものの、家訓を持ち出されると強くはいえなかった。しかし、ただでさえ繁殖力がある鼠を手厚く保護して増え過ぎるのも困るので、白い体で目は赤く、尻尾が体と同じくらいある、他の種と比べて数の少ない希少な鼠のみ飼うことを許された。男は渋々納得し、許可を得たその種の鼠を一生懸命世話するが、これは他の鼠に比べ繁殖能力が低いうえに、子供のうちは抵抗力がなく、生まれてすぐの間に死んでしまうことも多いのである。その数が多いときに男は店に来ては、普段あまり飲まない酒で悲しみを紛らわせようとするのである。事情をよく知らなかった若い娘二人が、なんだ鼠のことか、と思っているように、犬や猫ならまだしも鼠ぐらいで、という言葉葉を一度、出っ歯の男が言ったことがあるのだが、そのとき男は「犬や猫は死んじゃだめで鼠は死んでもいいっていうのか！」と、出っ歯の男に泣きながら飛びかかっていったことがあるので、皆もどうしたものかと困惑するのである。

倒れて嗚咽している男を材木屋と漁師が抱え上げ椅子に座らせた。その隣に役所の男が腰掛け、自分も十年間飼っていた犬が亡くなったときは本当につらかった、と自分の経験を交えながら慰めた。大体、こういったことは役所の男の役割で、この男に關しては何度か同じことがあり、その度に自分がこれまで飼ってきたペットの話を持ち出すのが常だった。鼠飼いの男からすれば「犬なんかと一緒にしてもらっては」といつも思うのだが、どう説明したって無駄なことだろうと思い、それが逆に冷静さを取り戻させ段々気持ち落ち着かせるきっかけにもなるのだった。そこへピアノの音色がまた鳴り響き、男はハツとした。この曲は男の一番のお気に入りだったからだ。ピアノの方を見ると女将の後姿があり、役所の男が「女将さんもあなたの好きな曲で励ましてくれてるじゃないか」と言っている間にギター之音も入ってきて、成年を見るといつもの笑顔で男に微笑みかけながらギターを弾いていた。皆は再び立ち上がった踊りを再開していた。役所の男が「さあ、君も踊ってきなさい」と男の背中をポンと叩き、娘二人組みも男の手を取り誘導した。はじめは重い足取りだった男だが、曲が進むにつれて表情が和らいでいくとステップも軽くなり、倒れる前の状態に戻っていった。女将は振り返って男の様子を見て、やれやれと軽く溜め息をつきながらも表情には微笑がもれていた。

曲が再開したのを見計らって、小太りの相棒は親方から逃げようと、チラチラと皆が踊っている方を見て、親方にダンスがしたいというのをアピールするが、親方は自分が話すのに夢中で、相手のことはそこまで意識していなかった。鼠飼いの男が倒れて泣き出したとき、自分も行こうとしたのだが「いつものことだから他の者に任せろ」と親方は席を立つのを許さず、以前監視からは逃れられないのだった。親方の話に適当に相槌を打ちながらも意識と視線は奥の

方に注がれていたが、ふと気付くと親方の声が聴こえなくなったので、よく見てみると親方は椅子に深くもたれ掛かり口を大きく開けて眠っていった。男は「今だ」と思いゆっくりと席を立ち上がって相変わらず曲からは微妙にずれているテンポで手や足を動かしている小太りの男のところに行き、「この野郎助け舟をだせよな、危うく閉店まで付き合わせられるとこだったろうが」と、さっそく曲のリズムに体を揺らせながら言った。小太りの男は笑みをこぼしながらフンフン言っているが、鼻で笑っているからなのか息が乱れているからなのかは男には分からなかった。

ピアノの音が伴奏だけになり、成年が一際真剣な表情になった。曲がギターの弦を指で一本一本弾いていくソロパートに入ると、皆の動きが小さくなり視線は成年に釘付けになり、入り口のところにはいた姪までもが奥に向かった。これには見習いが少し嫉妬したのか、姪が手招きしてもムスツとした顔で首を横に振ったが、姪のところからは見習いの表情までははつきりとは見えなかった。ソロのパートが終わると店内は大きな歓声と拍手が鳴り響き、アザの男は酔いも手伝ってかグラスを成年の口まで持つていき、成年が少しむせながらも飲むと、豪快に笑って肩を叩いた。成年は「カウンターで飲んでるときもこれくらい勢いで話してもらいたいもんだ」と思いながらも意識はちゃんと弦を弾く指に向いているのだった。

演奏は続き、次の曲に入ってからも皆の興奮は一向に落ちる気配を見せず、座って眺めていた役所の男やアザの男も手を引かれ、踊りの輪の中に投げ込まれた。次の曲になると、奥で腕を枕に眺めていた見習いも、姪の熱心な誘いに踊り場までは来るが、椅子に腰掛け踊りに参加しなかったのは、酔いのせいよりも、姪が他の客達と楽しそうに踊っているのが面白くなかったからである。その次の曲に入ると皆が真ん中を広く空け、それまで音楽に合わせて、どちらかというと静かに体を揺らすだけだった老人の娘が、踊り場の中央に移動し、このときのために体力を蓄えていたかのように激しくステップを踏み出した。娘がスカート裾を持って回る度に、見習いの視線が垣間見える足にいつているのに姪は気付いていて、耳元で「いやらしいわね」と呟くと、見習いは慌てて弁明するが、その間も視線は娘の足元を追っているのだった。娘が中央からカウンターへ行き、父親の手を引っ張ると、老人は「いい、いい」と頑なに立ち上がるうとしなかったが「じいさん、昔はすごかったんだろ、今日はちよつと披露してくれよ」と材木屋がはやしたてたのをきつかけに皆も声援を送るので老人も少し考えていたが、決定的だったのは踊ったことで酔いが更にまわっているアザの男の「やめた方がいいかもなあ、何かあったら責任はとれんしなあ」という一言だった。老人は立ち上がり、娘の手を振り切ると中央へと向かった。いざ出てくると皆は本当に踊れるのかと疑い深げに老人に注目した。ぶつぶつ老人が何かを言っているの、聴き取ろうと娘が近づこうとしたとき、手を開き腕を激しく動かし、足は左右交互に前に後ろに出したり引つ込めたりしだした。それが余りに奇抜だったので、皆は盛り上げながらも半ば呆気にとられていた。娘は父から昔「都会に居たときはよく踊りに行ったもんだ」と聞かされたことがあったが、実物を見るのははじめてで、まさかこんな奇抜な踊りだとは思っても

よらなかつた。これは老人たちが若いころ流行つた振り付けで、恐らく町では老人と同世代の者でも知ってる者はいないだろうと思われるが、都会から帰ってきたころは町の行事ごとの度にこの踊りをこれ見よがしに披露し、皆を今のように呆氣にとらせていたのだつた。しかし、昔流行つたとはいえ今となつては（町では昔もそうだったが）ま呪い事でもしてするようにしか見えなかつた。振り返つて十数年ぶりに見たその光景に女将は、笑いを堪えきれず、すぐにピアノに向きなおし小刻みに肩を震わせるので、横から見ている成年以外は女将が泣いていると勘違いされてもおかしくはなかつた。

さらに曲は続き、いったん座つて休んだり、飲み物を飲んだりしながらも、皆の勢いが下がらないのは演奏する二人の選曲がいいのと、演奏者自信が一番盛り上がったからだった。事実、女将も成年も疲れるどころか目の合図でアレンジを変えたりソロパートを差し込んだりして、それはさながら皆の踊りのためというより、二人のコンサートのようだった。鼠飼いの男は倒れ込んで泣いたのがついさっきのこととは思えないほど踊りに熱中し、小太りの男は額に汗噴きながら息を切らし、休んでは踊り、休んでは踊りを繰り返していたが、徐々に椅子に座る時間が長くなり、八曲目の途中あたりで腰掛けると、もう立ち上がりはしなかった。相棒は娘二人に接近することに成功し一緒に踊ろうとするが、二人は一箇所に留まらず踊りながら場所を変えていくので会話までには至らなかった。役所の男と漁師は老人の娘が踊りだしたあたりから、もう踊りの輪の中に引つ張られないようカウンターに移動していて、皆を見ながら二人で談笑していた。アザの男も椅子に腰掛け、はじめは手拍子や歓声を送っていたが、今はもう閉じようとする臉を支えるのが精一杯だった。二人組みと材木屋はまだまだ元気に踊っていて、二人組みが姪をからかいに移動しようとする、材木屋と老人の娘に野暮なことをするなと言われ、材木屋に腕や首根っこを捕まれ引き戻されると、娘からは説教を食らうのだった。見習いは姪の誘いを受けるとまでもなく娘の踊りのあとは立ち上がっていて、まだ少しぼんやりとする頭でなんとか音楽にのろうとはしていた。姪は見習いの手を引いて一緒に踊ろうとするが、今の見習いではどうしても姪のテンポから遅れてしまうので見習いは姪に腕を捕まれ引つ張りまわされるようにしか見え、二人を観察するのが好きな先生は二人に気付かれないように笑い、老人の娘にもそれを教え、二人はできるだけ凝視しないようにしながらも顔を見合わせて笑うのだった。それ

にしても、あれだけ大人しい子なのに踊りが始まると積極的になるのは何故だろうと先生は思っていたが、実のところ姪はこの時間ぐらいになると眠気が次々に襲ってくるので、余計に動き回ったり勤めて明るく振舞おうと努力するのだが、睡魔がある一点を超えると今度は意識せずとも気分が高揚してきて、それがちょうど踊り出す時間と重なり、いつも見習いを不思議がらせるのだが、当の見習いは酔いがまわっているときには、そんなことまで意識はまわらないのだった。

曲は休むことなく続いていき、もう今が何曲目か、演奏している二人ですらもいちいち数えてはいなかった。まだ踊り続けているのは見習いと姪、娘二人とそれを追い続ける男、そして二人組みのうちの出っ歯だけだった。皆はじめのときに比べると動きが鈍くなっている、演奏する二人も段々テンポのゆっくりとした曲へと移行していくので、誰もが音楽に合わせて体を揺らしているだけのように見える。自らの踊りが終わった後いつもの定位置に戻った父親を娘は起こしに行き「お父さん、いい加減に帰るわよ、姉さん達に大目玉をくらっちゃうわ」と自分が残ると言ったことをもう忘れてしまったような言いぐさで老人の肩を揺すった。老人はすぐに目を覚まし「寝てはいない」と目をパチパチさせながら言い立ち上がると、娘が引こうとする手を払いながら入り口へ向かった。しかし、ハツと気付き振り返ると、材木屋がすぐ後ろにいて、あの年季の入った帽子を持ち「忘れ物だよ、じいさん」と老人の頭に被せた。そして、材木屋が「みんな、俺はじいさん達を送ってくよ。女将さん」と言うとき、女将はピアノを弾くのを止めて立ち上がり入り口まで見送った。店内にはギターのみだけが流れ、娘二人も「私達も帰りましょるか」と話していて、ちょうど小太りの男や鼠飼いの男、二人組みもそろそろお開きにしようかと考えだしていたところだった。

材木屋がテーブルを動かし入り口の前を空け、娘と老人が外に出て女将が入り口のドアを支えながら三人を見送ろうとしていると、「女将さん私達も帰ります」と中から声がし、娘二人も身支度をしてドアのところまで来ていた。

「外は雪だよ、傘を持っていくんだよ」と言う女将の言葉に、後ろに続いていた小太りの男と相棒、鼠飼いの男、二人組みも外に出るまでもなく、店の前の通りが青白く輝いているのを見て気付くのだった。上着を着て傘を持ち外に出ると、皆は寒さに手を擦り合わせたり肩をすくめたりし、出っ歯の男は雪をすくい取ると相棒に投げつけた。相手もやり返そうと雪をすくい取ったところで老人の娘に「夜も遅いんだからやめなさい」とたしなめられ手のひらに握り締められた雪はこぼれていくのだった。「気をつけて帰るんだよ」という女将の声に老人以外は、手を上げたり声を出したりして応え、大通りのところでそれぞれの家路へと別れた。女将は皆の姿が見えなくなると店の中に戻り、もう後片付けをはじめている姪に「もう遅いし細かいことは明日やるからいいわよ帰る支度をしなさい」とこの子は本当に成長したわ、と思いつつ先生、漁師、アザの男、見習いも椅子やテーブルを元の位置に戻していて成年もギターをしまつとそれに加わった。女将は四人に礼を言うと思いつつは親方を起こすように言いつつ、自分はカウンターの中で姪が下げたきたグラスや皿を洗いはじめた。姪も着替えはしたが女将を手伝ったので、男連中がテーブルや椅子を戻している間に終わりそうだと女将は思いながら、見習いが親方を起こすのに悪戦苦闘している姿を微笑ましく見守っていた。親方は椅子に深くもたれ掛かり、口をあけ大きないびきをかき、見習いが呼びかけてもまったく起きる気配がなく、肩を揺すったりしてみたがそれでもダメなので、見習いは軽く頬を叩いて起こそうと思いつつみたが思いのほか力が

入ってしまいパチンという音が女将にも聴こえた。親方はゆつくりと起きだし、「もう帰る時間か」と視界に入ってきた見習いに聞いた。だし、頬を叩かれたことには気付いてないようなので見習いはホツとしたが女将は笑っていて、「何がおかしい」という親方の言葉を尻目に見習いは上着を取りに立ち上がった。

テーブルや椅子が皆が入ってきたときの状態に戻されたところで、女将の洗い物もやや遅れて終了した。途中から見習いも手伝ってくれたが踊りの間中、老人の娘をずっと見ていたことを姪から指摘され、見習いは必死に弁解をするがすればするほど姪の機嫌を損ねてしまい隣にいる女将は、この子は帰る間際になればなるほどよくしゃべるようになって、普段もこれくらいならいいんだけど、と思いつながら最後の皿を拭くのだった。

「さあ、帰りましょう、みんな傘を忘れないでね」と女将が発するころには、皆はもう入り口のところに集まっていた。先生がドアを開け、「これは、けっこう積もるかもしれませんが」と言うと、見習いと姪は先生を追い越して出て行き、雪の上で跳ねたり、すくい取って相手に投げたりした。「酔いを覚ますにはちょうどいい」と親方があくびをしながら言うと、ギターケースを抱えた成年は「南の生まれのオイラにはつらいよ」と空を見上げた。するとアザの男はもつと寒いところにいたときの体験を成年に話し出した。漁師は女将が出て来るまでドアを支えていて女将は「悪いわね」と言った。後で最後に誰もいない店内を見渡し電気を消して外へ出ると、ドアの鍵を閉め一回ドアノブを引っ張りちゃんと掛かっているか確認した。大通りのところで、先生とアザの男、陽気な成年、役所の男は左へ曲がり、手を振り「おやすみ」と言って、大通りを別れていった。もう、並ぶ家々からは明かりは漏れておらず、通りには雪の降り積もる音がどこまでも鳴っていた。漁師は女将の横顔を見ながら、また、遠い記憶をたどっていて、当の女将は都会に住む弟のことを考え、向こうでも雪は降っているのかしら、と都会に雪が降り積もる姿を想像するが、女将は都会へは数回しか行ったことがなく、そ

れもかなり前のことになるのでうまくはいかなかった。親方が姪と並んで歩いている見習いに「お前は、ちゃんとお嬢さんを送っていけよ」と言うと、二人は慌てふためくが、もう誰もそういうことは気にしていなかった。

街灯に照らされ青白く輝く道に五人の足跡が刻まれていく。二人並ぶ足跡はおそらく先に帰った二人の者だろうが、もうほとんど消えかかっている。誰も足跡だと気付く者はいなかった。雪はまだまだ降り続きそう、今しがた皆が残っていた足跡もしばらくもすれば、新しい雪によって覆われるだろう。朝を迎えるころ、降り積もる雪は、夜の痕跡を微塵も残さないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8617k/>

だんだん雪が降り積もる

2010年12月14日20時25分発行